

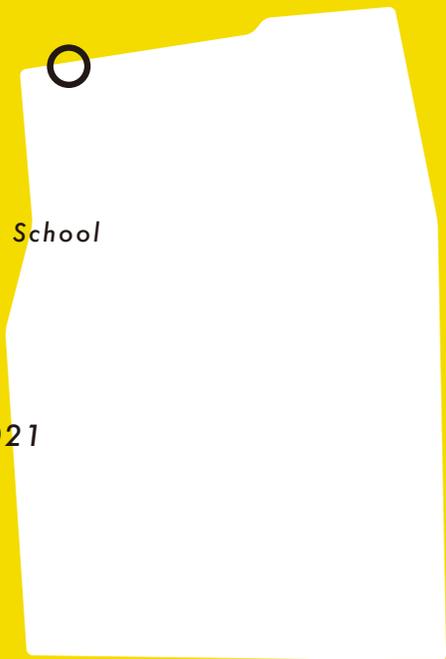
これから、

From here and now

ここから。

*The former site of Noshirokita Senior High School
and the future of Noshiro City*

能代北高跡地利活用スタートブック / 2021

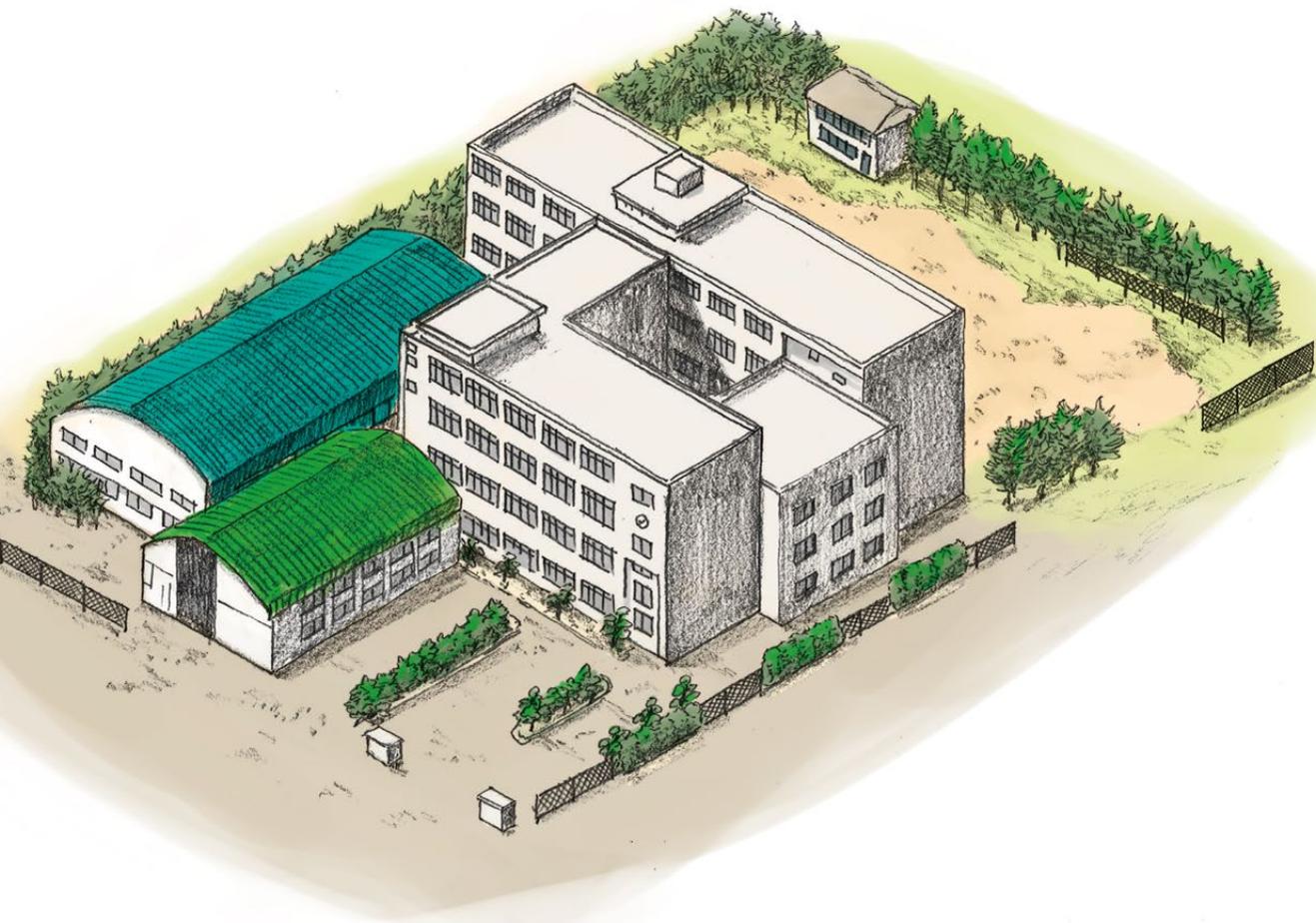




樽子山はその昔、 海岸から続く砂丘でした。

能代の木材産業と舟運を支えた米代川に沿うように、
東西方向に形成されたまちなみの、その南側。
ここ樽子山はその昔、海岸から続く砂丘でした。
まちを飛砂から守ろうと、秋田藩の賀藤景林によって、
文政、天保にかけてクロマツ等が植林され、
幕末の1850年代頃までに砂防林が整備されました。
樽子山の移ろいは、強風とともに、飛砂とともに
生きる宿命にある能代のまちの歴史でもあります。





砂防林の景観は、 徐々に変化していきました。

やがて樽子山は、大きな転換期を迎えます。

1920年代に能代北高校、能代高校（現在の中央公民館、文化会館の土地）、湊城南小学校が建設され、まちを守る砂防林が
生い茂っていた景観は、

徐々に変化していきました。

能代北高校はこの地で99年の時を刻み、

2013年3月に閉校。

能代商業高校と統合して、能代松陽高校として
場所を移すことになりました。





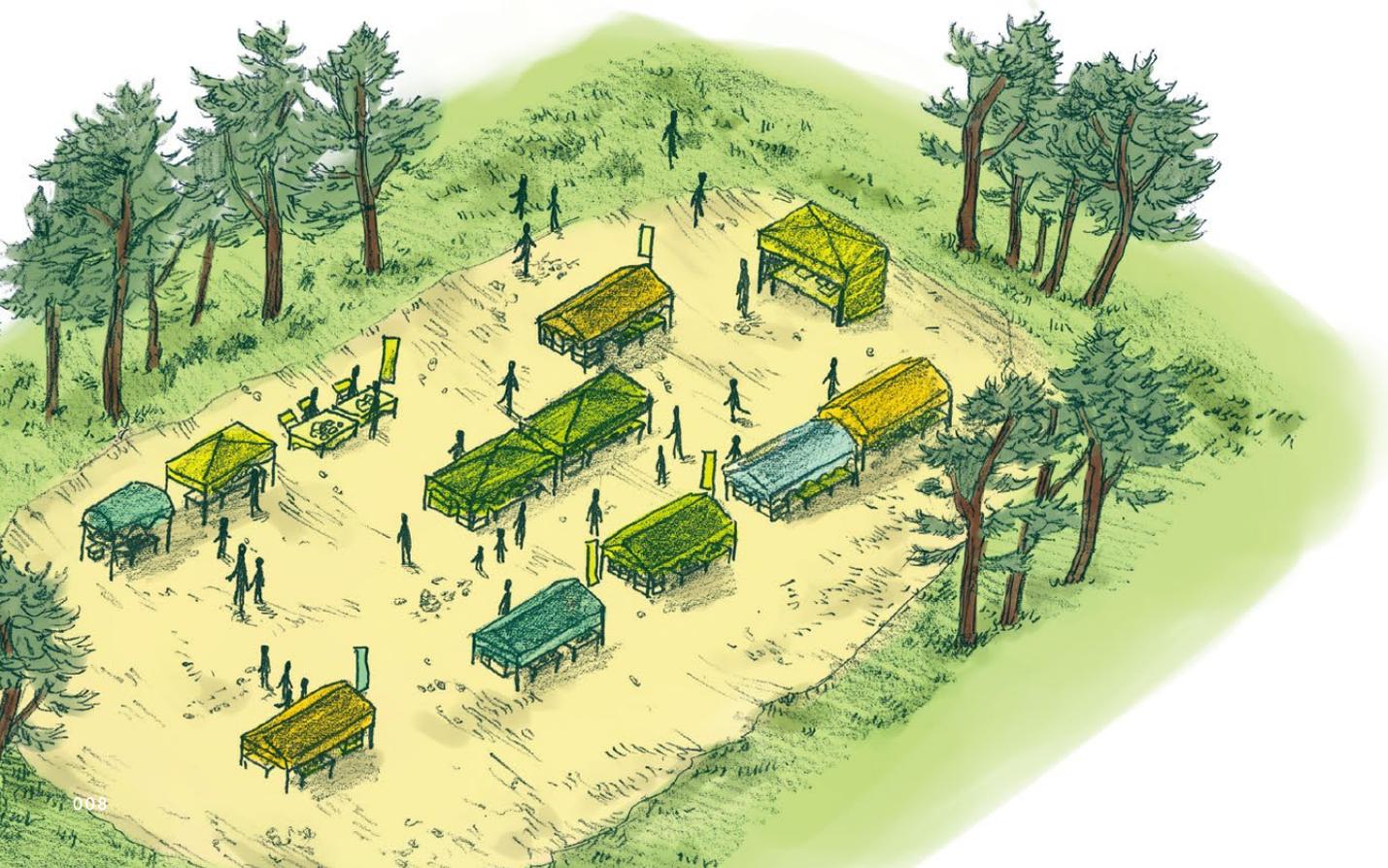
砂防の歴史と、 学校の面影のなかで。

能代北高校が閉校して解体され、
高台は「北高跡地」という名の更地になりました。
草むらと、わずかなクロマツが残る、ぽっかりと
空いた広大な土地。

駅から続く坂道を登れば、小学校から聞こえる子どもの声、
足下に転がる松ぼっくり。

砂防の歴史と学校の面影のなかで、「北高跡地」は
ゆっくりと時を刻んでいます。





能代の未来を、 この高台から考えよう。

空っぽになったままの「北高跡地」の活用は、能代の今後のまちづくりにおいて、重要な課題となりました。

「駅前の駐車場にしたい」

「ひろ～い芝生がいい」

「イベントをして人を集めて、まちに活気をつけたい」

「美術館や図書館など教育文化施設があればいい」

「ハコモノをつくるのは、もう止めたいね」

「ぶらっと立ち寄れるカフェがあったらいいなあ」

市民のたくさんの思いと願いが、「北高跡地」の未来に重なっていきます。

考え続けてきたまちの「これから」を
この高台から、さらに見つめたいと思います。

能代の未来を、これから。

ぽっかりと空いた、ここから。

これから、ここから。

能代のまちの小高い丘に、ぽっかりと空いたような、広大な更地。18,000㎡以上もの広さを誇るこの土地は、通称「北高跡地」。海岸砂丘から砂防林、その後は高等学校として親しまれた「北高跡地」が更地となって7年。いま、能代の中心市街地活性化の核として、この土地の活用方法が注目されています。これまで複数の提案や意見があり、周辺の商店街を含めたつながりを考慮した活用の検討が必要とされてきました。

能代のまちを、どうしていくのか。子どもたちに、どのようなまちを残すのか。まちについて、未来について、一緒に考え、語り合う「北高跡地」のプロジェクトが始まります。



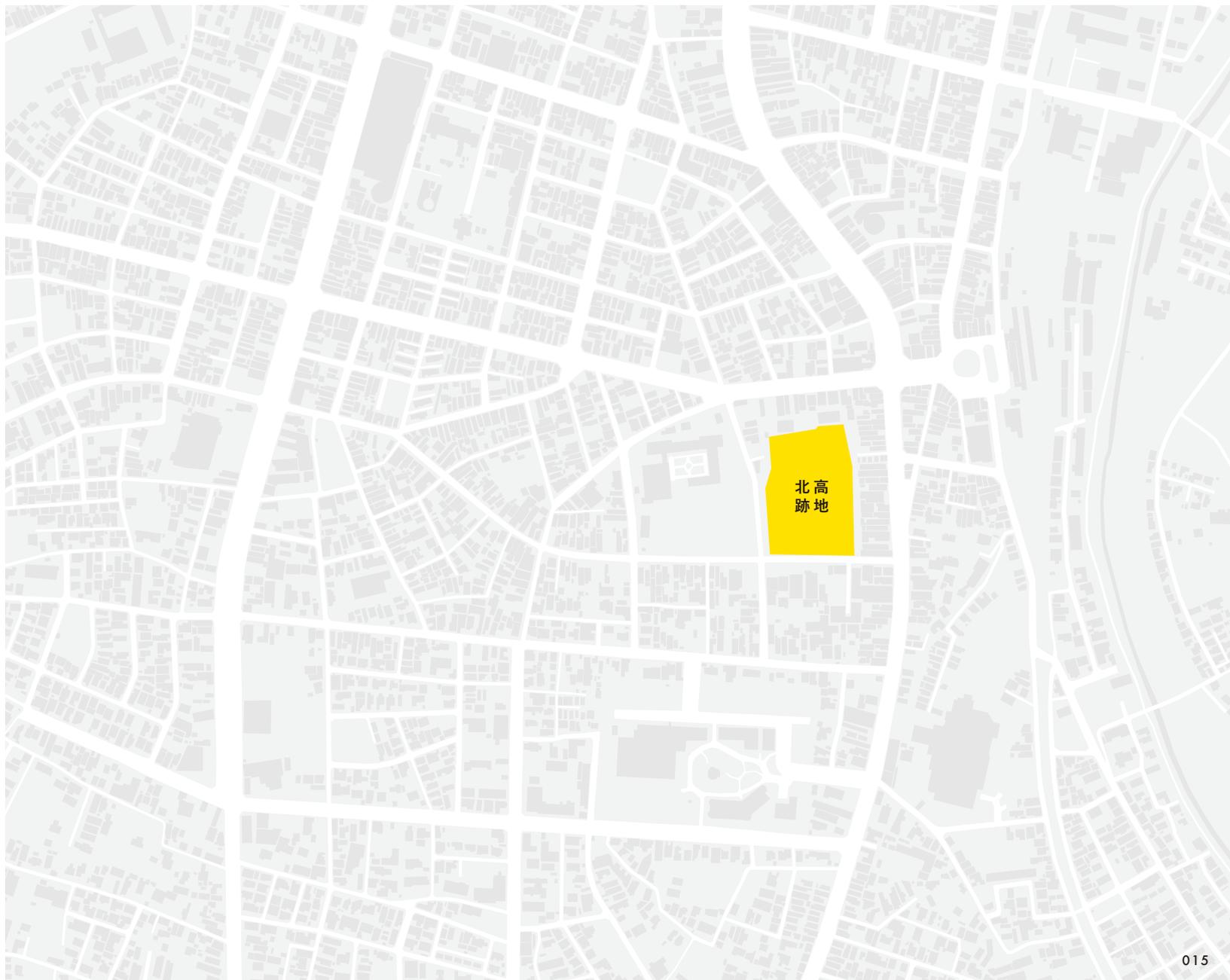
はじめに

「能代北高跡地」は、能代北高等学校と能代商業高等学校の統合に伴い、2014年3月、秋田県から能代市に譲与されました。集客や交流機能を持つ複合施設の建設を検討することを目的に、秋田公立美術大学景観デザイン専攻が2020年度に北高跡地の利活用基礎調査を行いました。

2021年度以降は、具体化に向けてワークショップを開催するなどして活用方法を検討することになっています。

江戸期に行われた町建てによって、米代川に沿うように東西方向に形成された能代のまちの南側。明治期まで樽子山と呼ばれた砂防林が、学校建設によって徐々に姿を変えて更地となった今、この土地にどのような可能性があるのでしょうか。北高跡地はこれから、どのような存在となるのでしょうか。

本書には、一連の基礎調査による北高跡地利活用に関する検討の報告や、まちづくりに関わる専門家等へのインタビューをまとめました。これから始まる、北高跡地利活用の検討に向けたスタートブックです。



目次

プロローグ「これから、ここから。」	002
はじめに	014
目次	016
1 能代北高跡地利活用基礎調査	018
2020年能代北高跡地利活用基礎調査業務	
2021年以降の検討イメージ	
2 北高跡地の在り方を整理する	022
関連計画	
アンケート調査	
3 まちのこと、樽子山のこと	026
北高跡地は海岸砂丘と連続した土地	
樽子山のすがた	
4 土地の記憶と特徴を生かす	030
北高跡地の変遷	
5 北高跡地は、標高約18m	034
どんな建物が建てられる？	
北高跡地周辺の用途地域および都市計画施設	
周辺施設との連携と相乗効果を	

Contents

6 座談会	040
能代のまちの未来を思考し続け、 循環していくなかで、見えてくるものとは。	
7 駅、商店街、公道活用の取り組み事例	056
油津商店街（宮崎県日南市）	
とおり町 Street Garden（広島県福山市）	
延岡駅（宮崎県延岡市）	
尾道駅（広島県尾道市）	
花園町通り（愛媛県松山市）	
葺合南54号線（兵庫県神戸市）	
8 これまでの意見	070
北高跡地に関連する能代市の動き	
9 北高跡地の可能性	074
Case1 恒常的な施設を建設する	
Case2 一定期間、仮設建築物を設置し、検討しながら施設を増改築する	
10 思考継続型プロジェクトの提案	078
まちのIncubation施設（孵化装置）	
思考し続けること、議論を蓄積することを目的としたプロジェクトの推進	
11 クロストーク	082
将来につながる、持続可能なプロジェクトを 継続していくこと、思考し続けていくこと。	
あとがき	088



これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School
and the future of Noshiro City



1 | 能代北高跡地利活用基礎調査

能代北高跡地利活用基礎調査では、「関連計画や先行事例の調査をもとに、北高跡地の利活用方策の検討を行う」ことを目的にフローを作成し、検討を進めました。まずは、「能代市総合計画」や「能代市都市計画マスタープラン」などにおける北高跡地の位置づけを把握・整理しながら、歴史的背景や経緯、周辺環境と既存施設、先行事例などを調査。関係各課や民間団体へのヒアリングによって跡地に求められるニーズを把握し、それらをもとに利活用の可能性と整備条件をまとめました。

▼関連計画等の把握・整理（「能代市総合計画」や「能代市都市計画マスタープラン」などの各計画から北高跡地の位置づけを把握・整理する）

▼歴史的背景および現況調査等（歴史的背景と経緯の調査、地域周辺の環境と現況既存施設の調査、国内における参考施設事例の調査、能代市の関係各課や民間団体へのヒアリングによって、北高跡地に求められるニーズを把握）

▼利活用の可能性と整備条件の整理（利活用の可能性と機能の検討、施設の用途や制約条件の整理、施設に必要な諸室の条件整理）

▼基本コンセプトの検討

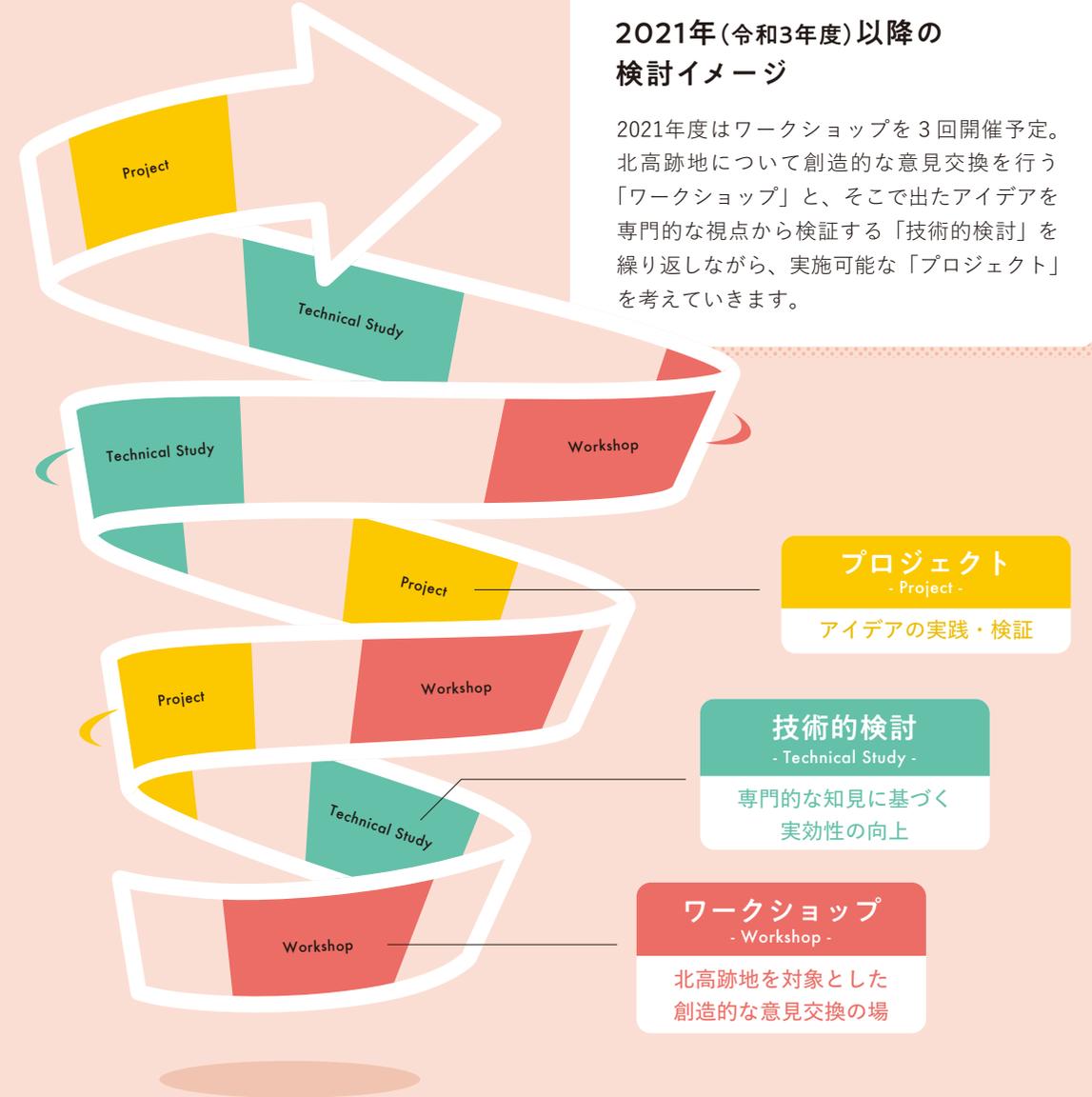
基礎調査では、これらから北高跡地利活用の必要性や意義、求められる役割に考察を加えながら、基本コンセプトに基づいた活用方策を検討しました。2021年度はワークショップでの意見交換やプログラムの実践などを通して、北高跡地の「これから」を模索します。

2020年(令和2年度)能代北高跡地利活用基礎調査業務

<p>関連計画等の把握・整理</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 関連計画等の把握・整理 能代市総合計画をはじめとする各計画から北高跡地の位置づけを把握・整理する。</p>		
<p>歴史的背景および現況調査</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 歴史的背景と経緯の調査 歴史的背景や北高跡地の利活用に関する経緯を整理する。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 関係者ヒアリング調査 関係各課や民間企業へのヒアリングによって、求められるニーズを把握する。</p>	
	<p><input checked="" type="checkbox"/> 地域周辺の環境と現況既存施設の調査 立地条件、周辺の土地利用、既存公共施設の立地条件を整理する。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 国内外における参考施設事例の調査 地域の活性化に貢献している国内外の参考事例を幅広く収集する。</p>	
<p>利活用の可能性と整備条件の整理</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 利活用の可能性と機能の検討 将来的な利活用の方向性や周辺への展開可能性を検討し、必要な機能を抽出する。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 施設の用途および制約条件等の整理 計画する施設の用途を明らかにし、施設整備に係る関係法令を整理する。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 施設に必要な諸室の条件整理 機能ごとに必要な規模等の条件を整理する。</p>
<p>施設のコンプットの検討</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 基本コンセプトの検討 北高跡地の利活用の方向性を定める基本コンセプトを検討する。</p>		
<p>活用方策概要の整理</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> 活用方策の検討 基本コンセプトに基づいた活用方策の概要を整理する。</p>		

2021年(令和3年度)以降の検討イメージ

2021年度はワークショップを3回開催予定。北高跡地について創造的な意見交換を行う「ワークショップ」と、そこで出たアイデアを専門的な視点から検証する「技術的検討」を繰り返しながら、実施可能な「プロジェクト」を考えていきます。





これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshiro City Senior High School
and the future of Noshiro City

2 | 北高跡地の在り方を整理する

能代市では平成22年の「能代市都市計画マスタープラン」に始まり、これまで「能代市公共施設等総合管理計画」、「能代市中心市街地活性化ビジョン・中心市街地活性化計画」など、まちづくりにおけるさまざまな計画が策定されてきました。調査チームではこれらの計画から、都市政策における北高跡地の位置づけを把握・整理しました。各計画の上位計画となる「第2次能代市総合計画」には、北高跡地は中心市街地活性化に活用することが明記されています。能代駅前や周辺の商店街と連携した面的な広がりを考慮する必要性が述べられており、敷地内で完結する独立性の高い計画ではなく、周辺へと波及していくような、地域の活性化に貢献する拠点としての役割が期待されています。

「中心市街地活性化計画」のアンケート調査では、北高跡地を「イベント広場・市民の交流の場・子どもの遊び場」として整備するという意見が多くありました。このことから、特定の機能に特化した施設整備よりも、年代に関わらない多数の人が多目的で利用できる空間が多くの人に望まれていることがわかります。また、「当面はそのまま維持」と答えた中心市街地居住者が18.7%いることから、早急な施設の整備を望まない人も一定数いることが確認されました。

一方、「能代市公共施設等総合管理計画」では、2047年までに公共施設の延床面積を35%（187,000㎡）削減して、施設管理にかかるコストを約480億円削減することを目標に掲げています。この計画では公共施設の新設は見込まれていないため、北高跡地に新たに建物をつくる場合は公共施設の集約化、収益施設の導入、民間資金の活用といった管理費削減の工夫が必要となります。

商店街を含めた線のつながり、面の広がりを

第2次能代市総合計画
／平成30年3月

北高跡地は中心市街地にある広い公共用地であり、県から譲渡された後、中心市街地活性化のために活用すること。また、複数の団体から活用に関する提案書等も提出されていることから、周辺の商店街も含めて線のつながり、面の広がりを考慮した活用の検討が必要であることが明記されています。

イベント広場や交流の場、子どもの遊び場に

第2期能代市中心市街地活性化ビジョン・
中心市街地活性化計画／平成31年3月

関連計画のなかで、北高跡地の活用について最も言及している計画です。アンケート調査「北高跡地利活用について、必要な施設・機能」では、「イベント広場・市民の交流の場・子どもの遊び場」の割合が高く、次いで「美術館等の教育文化施設」や「映画館等の娯楽施設」でした。北高跡地と能代駅前・畠町大通りに求められる機能はそれぞれ異なり、相互連携を図りながら適切な機能の導入が必要であることが示されました。

まちのにぎわいと産業創出・振興

能代市都市計画マスタープラン
／平成22年3月

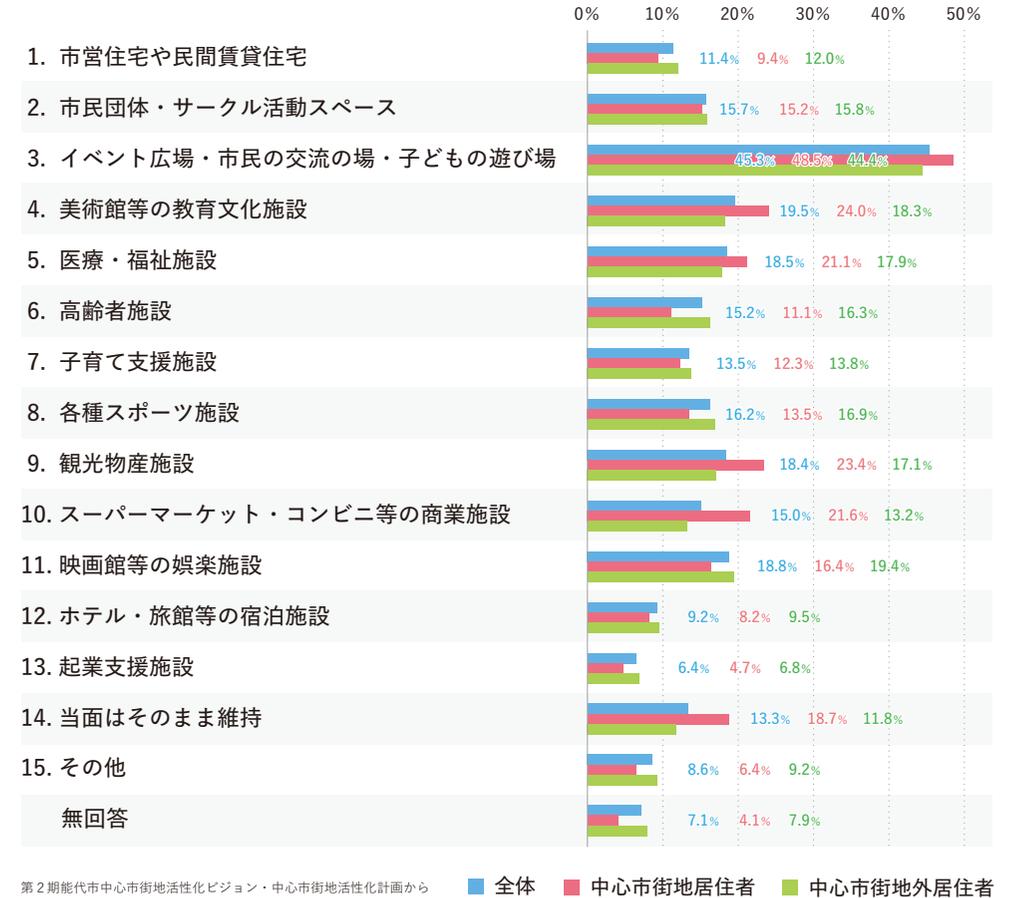
能代北高が閉校する以前に策定されたため、北高跡地に関する言及はありませんが、北高跡地が位置する能代中央地域に対する将来像や住民の意見がまとめられています。能代中央地域の将来像として、能代の祭り、風の松原、能代港を中心とした「まちなかのにぎわいと産業創出・振興を図る地域」が掲げられました。

公共施設の延床面積を35%削減！

能代市公共施設等総合管理計画
／平成29年3月

北高跡地への言及はありませんが、2047年までの公共施設の管理に関する基本的な方針がまとめられています。公共施設等の管理に関して市全体の縮減目標が掲げられ、耐用年数の1.2倍までの使用や維持・更新にかかる費用を15%程度削減した上で、2047年までに公共施設の延床面積を35%削減する必要があると明記されています。

アンケート調査 「北高跡地利活用について、必要な施設・機能」



3

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokiō Senior High School
and the future of Noshiro City

3 | まちのこと、樽子山のこと

能代のまちは16世紀初期から中期にかけて、清助町、後町、下川端町、大町、上町の5町の成立に始まり、18世紀までに17の町によって形成されました。1650年頃から1700年頃までの約50年間には、10以上の町建てが行われています。短期間に数多くの町建てが行われた背景には、秋田杉を中心とする木材産業の隆盛がありました。舟運を中心とする物流システムを支えた米代川に沿うように、まちなみは東西方向に形成されていきました。

まちは米代川の洪水、海岸砂丘からの飛砂、地震や強風による火災の被害などに幾度となく見舞われ、その災害対策が現在のまちなみをかたちづくる大きな要因となっています。大火災を発生させた能代地震（1694年）と羽後陸奥地震（1704年）は、地名を「野代」から「能代」に変更するきっかけとなりました。さらに1949年と1956年に発生した能代大火は甚大な被害をもたらし、復興計画として行われた防火地帯の設置や道路拡張などの整備が、現在のまちなみを特徴づけました。

能代では飛砂からまちを守るために、長尾祐達（ながのおつと）が1670年頃に海岸砂防策を主唱したことをきっかけに、海岸砂丘を中心として断続的な植林が行われました。賀藤景林（がとうかげりん）が1822年に能代木山方兼務になると、景林とその子である景琴（かげこと）の主導で1858年までに100万本を超える植林が行われています。長い期間をかけて取り組んできた飛砂害対策が、現在では観光資源でもある「風の松原」をはじめとする能代固有の景観をつくったといえます。樽子山もまた、飛砂対策として整備された砂防林としての歴史を刻むことになりました。

北高跡地は海岸砂丘と連続した土地

能代市の中心市街地が築かれた能代平野は、米代川下流に展開する海岸砂丘に閉ざされた東西の最大幅15km、南北の長さ40kmの低地です。

海岸砂丘と砂州が発達した日本海沿岸の平野は、北西季節風による砂州の成長と風によって吹き上げられた乾燥砂の堆積が起源とされています。沿岸から約2.5kmの北高跡地も、地質図を見れば海岸砂丘と連続した新期砂丘堆積物で覆われていることが分かります。



北高跡地周辺の地質図 出典：地質図一産総研地質調査総合センター

樽子山のすがた

北高跡地が位置する現在の追分町は江戸期に形成されたまちなみの南側にあり、明治期までは樽子山と呼ばれた砂防林でした。樽子山には18世紀後半までにマツが植林されたといわれており、1850年には「賀藤景林君之神霊」の石碑（後に能代公園・景林神社に移設）が建てられました。このことから、樽子山は当時の町民にとってまちに近接した砂防林という、沿岸部の砂防林とは異なる性質を持っていたことが推察されます。

浅野ミヤ『能代砂防林の300年』には、明治末期（1910年頃）の松林区域が推定されています。

樽子山と呼ばれた砂防林が姿を変えていくのは、大正に入ってから。

1922年に能代北高の前身である能代港町立能代高等女学校の建設に始まり、県立能代中学校、淳城尋常小学校の建設に伴い、砂防林の景観は消失することになりました。



1910年頃の松林区域（推定）

これから、ここから。 | From here and now

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School
and the future of Noshiro City羽後国山本郡能代港
河海浅深測量見取圖

4 | 土地の記憶と特徴を生かす

北高跡地は、追分町という地名の通り、羽州街道と分かれ日本海沿いに津軽弘前へと向かう大間越街道をはじめとするさまざまな街路の分岐点に位置しています。明治初期に描かれた「羽後国山本郡能代港河海浅深測量見取図」（秋田県立博物館蔵）を見れば、樽子山は開発されずに、「町」への入口をかたちづけていたことがわかります。そして航空写真でその変遷をたどれば、この地に集中していた主要な街路の発展を読み取ることができます。これは、樽子山がかつて「町」に隣接する砂防林であった名残ともいえます。

北高跡地の利活用には施設の維持・管理など今日的な課題への対応だけでなく、こういった土地固有の特徴を生かした空間をつくり出すことも重要であると考えます。

「羽後国山本郡能代港河海浅深測量見取図」（秋田県立博物館蔵）

北高跡地の変遷

1948-2014

アクセス | 1948年には、東側からのアクセスが強調された建物配置や外構デザインが認められます。
このアクセス路は現在も残っていますが、1948年当時のような明快な役割は与えられていません。

グラウンド | 校舎の建て替えに伴い、グラウンドは敷地の東側から南側に変更され、最終的には北側に設けられました。



樹木 | 1948年時点では敷地を取り囲む樹木が確認できますが徐々に減少。現在は敷地境界の一部に配置されています。

出典：国土地理院

5

これから、ここから。

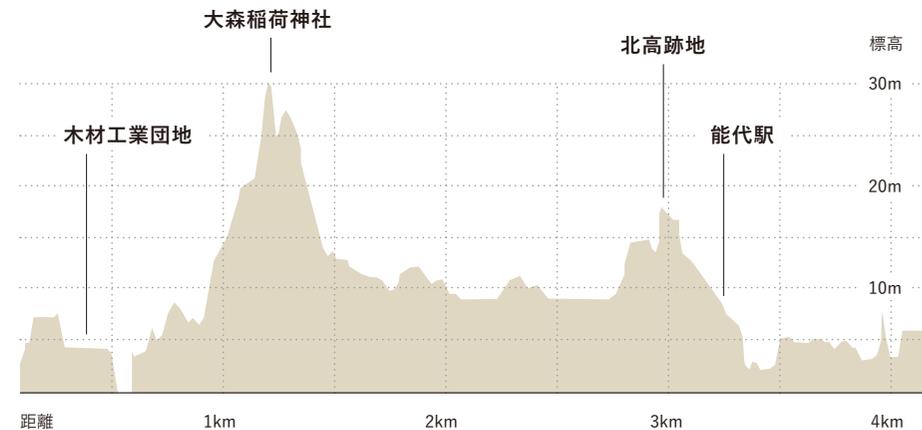
From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School
and the future of Noshiro City



5 | 北高跡地は、標高約18m

能代平野の中央に位置する北高跡地は、小高い丘になっています。広域的に見れば、日本海沿岸部に多く認められる海岸砂丘に閉ざされた平野に立地していて、中心市街地に限ってみれば周辺と識別可能な高地に位置しています。地盤面の高さは北側の隣地とは7m、東側とは3mほどの違いがあり、跡地の標高は約18m(断面図参照)。平野のなかでも小高い場所であることは、北高跡地の立地における大きな特徴です。



能代駅と、「風の松原」に佇む大森稲荷神社を結ぶ軸線の断面図

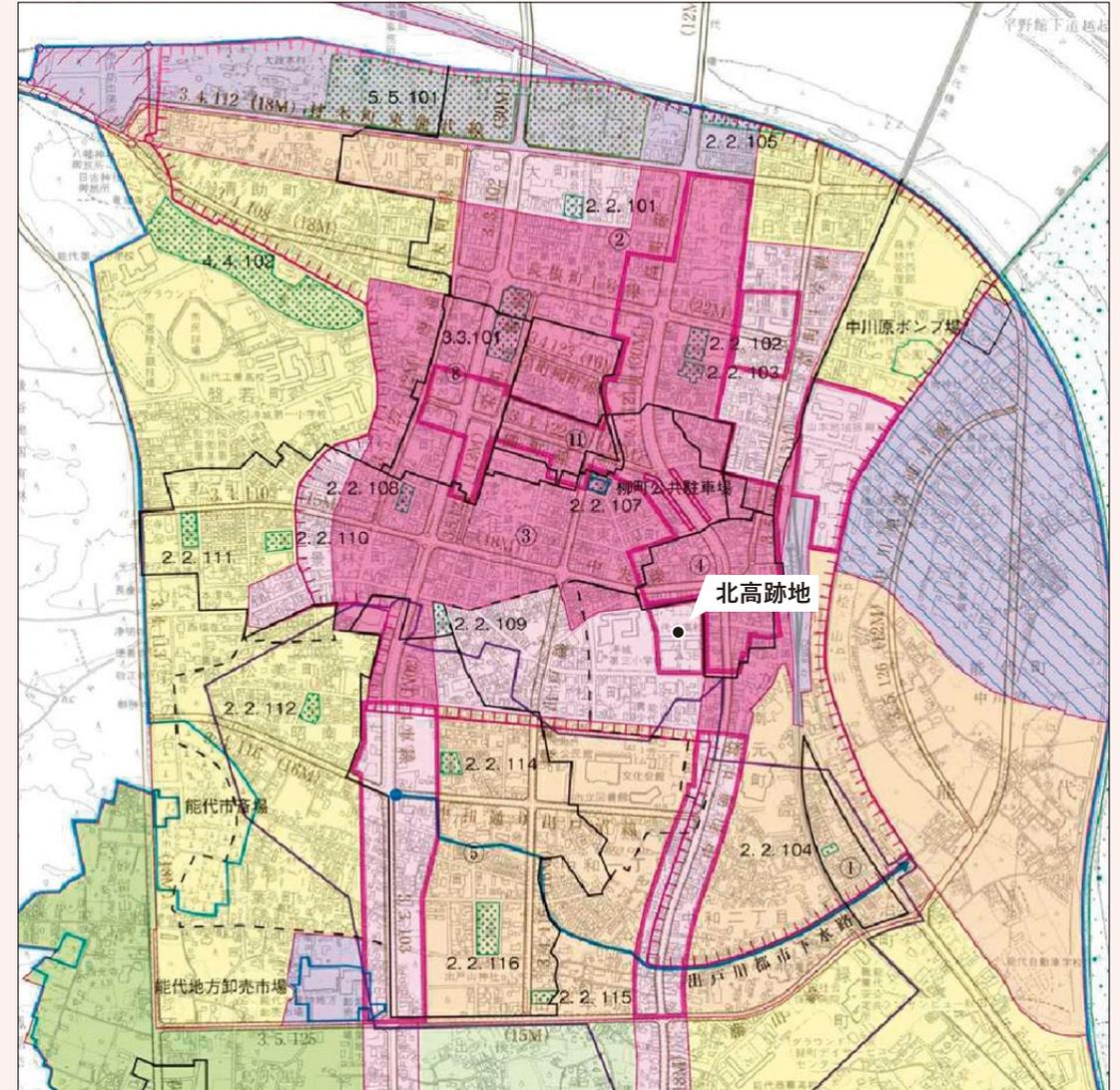
どんな建物が建てられる？

北高跡地の用途地域は近隣商業地域となっており、周辺には商業地域、近隣商業地域、第一種住居地域、第二種住居地域などが広がっています。近隣商業地域は、周辺の住民が日用品の買い物などをするための地域づくりを意図したもので、住宅や店舗のほか小規模の工場も建てることができます。また、建築面積の上限は15,000㎡程度、床面積の上限は75,000㎡程度となっています。施設の広さを例える時によく使われる東京ドームは、建築面積が約47,000㎡、グラウンド部分に限定すれば13,000㎡の広さですから、北高跡地には巨大な建築物を建てることも可能です。言い換えれば、まさにふさわしい適切な規模を検討することがとても重要です。

〔北高跡地周辺の用途地域および都市計画施設〕

都市計画区域界		【地域地区】		容積率% 建ぺい率%		容積率% 建ぺい率%	
第一種低層住居専用地域	80	50	商業地域	400	80	防火地域	
第一種中高層住居専用地域	200	60	準商業地域	500	80	準防火地域	
第二種中高層住居専用地域	200	60	準工業地域	200	60	臨港地区界	
第一種住居地域	200	60	工業地域	200	60	商港区	
第二種住居地域	200	60	特別工業地区	200	60	工業港区	
近隣商業地域	200	80	娯楽・レクリエーション地区	400	80	修景厚生港区	
	400	80	娯楽・レクリエーション地区	200	60		
			無指定	200	70		

【都市計画施設】			【市街地開発事業】	
都市計画道路	市場	公共下水道（排水区域）	土地区画整理事業計画決定区域	
駅前広場	火葬場	都市下水排水区域	土地区画整理事業施行区域	
公園	汚物処理場	都市下水路		
緑地	駐車場			



能代市都市計画総括図（能代地域）

周辺施設との連携と相乗効果を

「中心市街地活性化計画」で実施したアンケート（p25参照）において、中心市街地居住者、中心市街地外居住者ともに北高跡地への要望として最も多かったのが「イベント広場・市民の交流の場・子どもの遊び場」でした。しかし跡地周辺には文化施設、市営住宅、都市公園などの公共施設や都市計画施設が数多く点在しており、求められる機能を有する既存施設も認められます。北高跡地については、周辺の商店街や公共施設との役割分担の明確化と効果的な連携により、種々の施設間で相乗効果が生まれるような仕組みを検討していくことが重要となります。

〔既存施設の配置状況〕

● 北高跡地		● 子育て支援施設	5
● 市民文化系施設	6	● 保健・福祉施設	8
● 社会教育系施設	2	● 公営住宅	5
● スポーツ・レクリエーション系施設	7	● 公園	19
● 学校教育系施設	8		

風の松原

● 能代市役所

● JR 能代駅

北高跡地

米代川河川緑地

北高跡地周辺の公共施設



6 | 座談会

能代のまちの未来を思考し続け、 循環していくなかで、見えてくるものとは。

能代北高跡地利活用基礎調査チームが、専門家を交えてオンライン会議を開催。北高跡地を含むエリアの今後の可能性やまちづくりのビジョンの種を炙り出そうと試みました。(2021年3月)

Member



湊 哲一

ミナトファニチャー主宰。のしろ家守舎など
能代駅前活性化・まちづくり活動を実践。能代市在住



田宮 慎

casane tsumugu代表。地域のプランディングや
秋田県内の伝統工芸品等を手がけるディレクター



松本 貴之

大手不動産企業社員。神田神保町や日本橋、柏の葉
スマートシティといったまちづくりを長年手がける



足立 幸司

秋田県立大学木材高度加工研究所准教授。秋田県内の
木材事業者や行政、地域と協働し、多くの技術開発を
手がけ、地域資源を掘り起こす。能代市在住



小杉 栄次郎

秋田公立美術大学景観デザイン専攻教授。
北高跡地利活用調査チーム



井上 宗則

秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授。
北高跡地利活用調査チーム

将来、商店街がどうあるべきで、だから北高跡地は
こうあるべしと、まちの在り方とセットで提案する必要が
あるというのが、調査チームの現在の想いです。(小杉)

北高跡地は「第2次能代市総合計画」(平成30年3月)において、「周辺の商店街等も含めて、線のつながり、面の広がりを考慮した活用の検討が必要」とされ、中心市街地の要に位置づけられています。「中心市街地活性化計画」(平成31年3月)の住民アンケートでは、北高跡地に必要な施設・機能として「イベント広場・市民の交流の場・子どもの遊び場」が最も多く、次いで「美術館等の教育文化施設」や「映画館等の娯楽施設」という結果となりました。これまで複数の民間団体から具体的な提案書が提出されているほか、平成23年には山本地域振興局のしろまちづくりプロジェクトチーム※によって、能代駅前の整備計画や畠町通り再編の具体的な提案がなされてきました。

※客観的な視点から能代市の活性化を考えるため、秋田県外または能代市外の都市デザイン・都市計画・建築・商工などの専門家が多数参加した時限的組織

これらを踏まえ、北高跡地利活用調査チームが基礎調査を進めるなかで浮き彫りになったのが、

- ・床面積を35%減じないと持続できない公共施設保持状況
 - ・文化的欲求、消費欲求を満たすだけの施設は成立しない現実
 - ・経済的、人材育成的な面で、投資の意義と回収の見込みがある施設(プログラム)を計画することの重要性
- 以上3つの課題でした。

大型の施設をつくることでまちづくりの課題を解決して地域を再生することは難しく、たとえ素晴らしい機能(プログラム)を開発したとしても、まちづくりのビジョンが下敷きでなければ意味がありません。専門家を交えた座談会では、北高跡地を含むエリアの今後の可能性や、まちづくりのビジョンの種を炙り出そうと試みました。



小杉 基礎調査を進めていくなかではっきりしたのは、ここに新しい公共施設をつくった場合、市内にある同様の機能を持つ公共施設を集約しなければ、この先15年、20年と持続できないという現実でした。また、自分たちが満足するサービスを楽しむためだけではなく、そこに能代市の未来に対して投資的な意義のあるものをつくらなければいけないと強く感じているところです。その上で、利活用調査

チームが描いた利活用のイメージはいくつかあります。それを挙げると、

- ・能代の歴史、文化、地理等すべての資源・情報を並列に陳列する博物館的機能

- ・リカレント教育※と絡めることで、小中学生といった子どもたちへの投資、高齢者の働く場、学ぶ場となり得る

※学び直し、生涯学習ともいわれる学びを広くとらえる言葉

- ・コンテンツを並びかえることで、能代をさまざまな視点から表現、説明できる場所となり得る。更新可能性が、機能の持続性を担保するのではないか

- ・木材高度加工研究所という稀有な研究施設や宇宙科学研究所のサテライト拠点（民間企業とのマッチング、新たな事業展開をもたらす場。学生など若い人が街の中心部にいることの意義は計り知れない）

- ・カフェなど飲食によって運営事業費の自主回収を考慮する必要がある

などでした。また、敷地周辺の能代市中心市街地では、お店を辞めている人が多いなかで、湊さんをはじめ少なくない市民が商店街を盛り上げようと頑張っている。それによって、ここ数年、急激にまちの雰囲気が変わってきていると感じています。そうした状況を目の当たりにしたことで、今後、北高跡地の利活用を考えるには、ここにつくる施設のことばかりを考えるのではなく、この土地の周辺



秋田県立大学木材高度加工研究所

がどうなっていくのか、どうしていくのかを一緒に考えていかなければならないということに気づきました。

今、能代市の総合都市計画の見直しの時期にも重なっており、将来、周辺の商店街がどうあるべきで、だから北高跡地はこうあるべしと、まちの在り方とセットで提案する必要があるというのが調査チームの現在の想いです。そこでさまざまな知見からご意見をいただくような場を設けようと、この座談会を開催することになりました。実際に能代市中心市街地のまちづくりプレイヤーとして活動している湊さんと、秋田県内の多くのまちのブランディングに関わっている田宮さん、木高研における研究活動に加えてまちや人と木をつなげる活動をしてい

湊君たちが「のしろ家守舎」を始めましたけれど、
 そうやって代謝を上げていくことで、変わっていくことはあるんじゃないかなと思います。（田宮）

らっしゃる足立さん、そして大手不動産会社に勤務され、日本橋や柏の葉のまちづくりに取り組んでいらっしゃる松本さんの4名にご参加いただき、それぞれの視点から能代のまちの「これから」についてご意見をいただきたいと思います。

湊 まちを元気にしたいと思い、のしろ家守舎というまちづくり会社を立ち上げて活動を始めています。僕が能代に戻ってきて4年目になりましたが、2年目ぐらいに商工会議所さんに呼ばれて、能代駅前の再開発についての勉強会に頻繁に参加していました。そこでは、あれが欲しい、これが欲しいという意見が多く、そもそも人がいない駅前に再開発の話を持ち込んでも何も進まないよねというところで議論がフェードアウトしていったと僕は感じていました。そうした経験もあり、シャッター街で老朽化もしているまちだけど、スピード感を持って少しでもいいからソフトの部分動かして、みんなで何とかして人を呼び込み、並行してこの北高跡地についても進めなければいけないだろうなとずっと感じ

合同会社のしろ家守舎を立ち上げた4人



ていて。これをつくりたい、あれをつくりたいというだけではなく、いい議論の場がつけられたらいいなと思っています。

田宮 僕は10年ぐらい前から湊君と一緒にプロダクトをつくったりしています。帰省するたびに能代に来たりして、駅前や商店街はよく見えました。親が大館の出身なのですが、大館と能代の駅前の雰囲気には似たような印象を持っています。どちらも大火があったので木造の建物が少なく、建物が連なっていて、かつての景気が良かった頃の名残がむしろ寂しさを助長しているというか。古い日本家屋って、建物が寂れていても味になる一方で、昭和に入ってから建物のというのは時間が経過すると寂しさを助長するという印象を持っています。

2010年に秋田市でまちづくりフォーラムを開催した時に、全国で商店街の活性化事業を手がけている木下齊さんに来てもらいました。木下さんは、「活性化」とか「にぎわい」という抽象的な言葉ではなくて、いかに地域で事業を生み出していくかをテーマに活

単にこういう施設が欲しいというのではなく、人がいることができる空間から考えるような取り組みであってほしい。(足立)

動をされています。マイクロビジネスといったものをいかに地域のなかに創出できるかを考え、ビジネスプランコンテストみたいなのも当時はやったりもしていました。

商業施設をつくったからといって、まちが変わるかという、なかなか難しいなというのが実感としてあります。能代駅の現状を考えると、15分間でさまざまな施設にアクセスできるコミュニティー生活圏をいかにして底上げできるのかということがポイントなのではないかなと思っています。また、木高研や高校以降の教育機関が若い人を集め、自然発生的に何か生まれていくのではとも感じています。湊君たちがのしろ家守舎をつくって活動を始めましたけれど、そうやってまちの代謝を上げていくことで、変わっていくことはあると思います。商店街でシャッターを閉めている人には「別に閉めたままで、貸さなくても困らない」とよく言われます。そういう人たちと対話しながら、部分的にでも貸してもらえような体制を整えていくだけでも、まちは随分変わってくるのではいつも思っています。対話していくことが一番大変なんですよ。

小杉 戦後から高度経済成長期にかけての物がどんどん売れる時代は、日本全国どこの商店街も経済的に結構うまくいってました。しかし現在ではAmazonなどEコマースも増えて苦戦しているのが現状です。じゃあそこで商店街は今後何を売るのが、

売るのはモノだけなのかとか、そういうことを考えていくことも重要になっています。シャッターを閉めるのではなく、じゃあ次の業態として、商店街がどうあるかみたいなこと。また、職住一体の商店街で高齢化が進んで閉めた店舗部分をどう代謝させていくのかもすごく重要ですね。

足立 技術に期待して、能代でもうちょっと何かできるんじゃないかという声はすごく聞きますね。例えば持っているシーズを使ってインキュベーション・センターをつくるとか。能代にいても大都市圏の上場企業との共同研究は頻繁にやっているわけなので、サテライトのオフィスをつくるなど、もっと中央から企業の人を呼んでくるような場をつくるべきではないか。能代の商工会議所の人と話していても、インキュベーションのアドバイスをする科学技術振興機構の方と話をしても言われることなので、考える余地はあるかなと思います。ですから、小杉先生からうかがった中心市街地に木高研のサテライトをつくるという提案は、私自身は可能性はあるかなと思いますが、大学としては前例がないので、丁寧に検討していく必要があります。

私は家族で能代市に引っ越して暮らしているのですが、一能代市民としては、中心市街地に積極的に足を運べていないのが現状です。子どもたちに話を聞いても、まちなかに居場所がないとよく言われます。建物が場所を取っていて、人の場所がないという本

末転倒な状況です。そういうことも含めて、湊さんや小杉先生たちが進められているまちに子どもたちが滞留できる場所をつくる取り組みは、すごく心強いというか、元気な活動と思っています。ただ単にこういう箱が欲しいという意見では、「もうこれ以上要らないよ」という答えが返ってきます。人がいることができる空間から考えるような取り組みを期待して、北高跡地の利活用をもうちょっと慎重に考えるべきじゃないかということに私は賛成します。

井上 企業との共同研究は、どのぐらいの期間で実施されることが多いのですか。

足立 ものによりますね。通常、この技術が使えるかどうかというのを企業側は3カ月ぐらいで見極めます。うまくいきそうであれば1年やって、そこで芽が出るようだったら3年、5年というふうに、芽がだんだん育っていく感じになりますね。もう10年ぐらい共同研究をしている企業もあります。そういったところは能代に拠点を移してもらったほうが楽なんじゃないかというような話はよくしますね。

井上 単年度で成果を求められる事業や研究が多くあるなかで、10年に及ぶような長期間の研究を行うのは、木高研の魅力のひとつですね。

小杉 まさにそうです。足立先生は東京の大手企業とも共同研究をされていますが、その企業の方は「秋田に行くのは楽しみなんだけれど、木高研は遠い」と。「例えば能代駅前に木高研のサテライトスペースがあれば、飛行機とバスや電車で能代駅まで来て、

打ち合わせ後はお酒も飲めるし、その後、電車で秋田市や別のまちに行ってもいい。本当はそうしたいけど、今は空港からレンタカーを使うしかない」といった話を聞きます。研究設備や実験の確認などはもちろん木高研の現場に行ったほうがいいけれど、先生や学生らとの打ち合わせは能代駅前でするし、そうすると中心市街地の人の流れが変わるだろうと思います。現在は木高研に行くには車移動しか選択肢がなく、そうすると、目的地以外はスルーされてしまいます。木高研の先生方の研究は息の長い重要な研究がいっぱいありますから、企業との接点となる場所が能代駅近くにあるのはいいですね。

松本 能代のことを語るほどの知識も見識もありませんけれども。能代に限らず土地の利活用については、高度経済成長期の頃ならばいろいろなアイデアがあって何となく成り立っていたかもしれませんが、現在は、質をどう高めていくかということが重要だと思います。そのまち独自の何かを掘り起こすというか、見えていないものを再認識して、それをどう取り戻していくのか。

私は日本橋のまちづくりに長く関わっているのです

残すこと、蘇らせること、創っていくこと。時間がかかることもあるんですけど、気持ちのひとつになっていくところが大事だなと思います。

(松本)

が、日本橋はご存じの通り、江戸の商業地の一大集積地で、非常に栄えていた場所です。ただ、高度経済成長期が終わって1980年代、90年代になると中央通り沿いに金融関係の店舗が建ち並び、そこは3時になるとシャッターが閉まっちゃう。表通りに商店が少ないので、人通りがあるのは三越や高島屋、東急百貨店といった辺り。あとは老舗の店舗を回遊する人が見られるぐらいという、実は危機的な状況がありました。それをどうにかしなきゃいけないということで、当社は日本橋が故郷の会社ということもあり、まちの旦那衆の皆さんといろいろな話し合いを行いました。そこでキーワードにしたのが、『残しながら、蘇らせながら、創っていく』でした。残すというのは、将来にわたって残す価値があるものは残していきましようということ。蘇らせるというのは、もうまちから無くなったけれども、もう一度取り戻したいものは何かを考えましようということ。創っていく、というのは、新しい何かを生み出していこう、例えば新産業を創っていきましようという趣旨です。

今、日本橋ではJAXAと組んで宇宙の企業拠点にしてみないかというような話をしたり、日本橋は薬種問屋のまちでもあったので、そういうルーツを持つ会社や団体、大学などを結んで何かネットワークができないか考えたり、新しいこともやりながらまちづくりを進めています。また、日本橋という橋の上を1964年の東京オリンピックの時につくられた高速道路がふたをしているのですが、この状態からかつての景色を取り戻そうということで数年かけて40万人の署名を集めました。やっと都市計画決定もして、事業が動き出しているという状況です。この運動は

数十年間やっており、時間はかかりますが、気持ちがひとつになっていくことが大事だなと思います。能代には能代の悩みもいっぱいあるでしょうし、ネットワークみたいなことをしながら雰囲気をつくっていても、土地の利活用が具体化されるまでは10年かかるような話かもしれません。これはどこのまちでもそうで、日本橋も本当に20年、30年かかってやっと少し戻ってきたという状況なので、それぐらいの時間がかかると考えてはどうでしょうか。とはいいいながら、その期間にまちが寂しくなるだけだと何となく気持ちも沈んじゃうので、楽しいことも少しずつやりながらみんなの気持ちをまとめていくという気の長い作業は必要だと思います。

井上 『残しながら、蘇らせながら、創っていく』という考えは、まちづくりにおいて普遍的な原理だと感じましたが、日本橋のような場所で経済的な側面とバランスを取りながら、みんなの考えをまとめていくのは難しそうですね。



中心市街地をどうしていくかという総合的な議論を行政と市民と一緒に考えることからしか、意義ある北高跡地の利活用は生まれえないのではないかと。そうした議論を進めていくなかで、北高跡地にあるべき公共スペースの検討方法として考えたのが「思考継続型プロジェクト」です。(小杉)

松本 日本橋はただのビル街のように思われるかもしれませんが、昔から町会組織や老舗同士のコミュニティが非常にしっかりしている地域です。老舗の旦那たちや、その次の世代も育っていて上下のコミュニティも横のコミュニティもあるわけなんです。また、当社はなりわいが不動産会社で、長いスパンで事業を考える業態です。しかも日本橋が故郷だということ、日本橋の当社の資産も割と集中していることもありまして、会社としてまちづくりに関わる動機づけがあるわけですね。そういった要因がうまくかみ合っているのかなと思います。

小杉 日本橋のまちづくりの話聞いて、松本さんの会社は長い時間をかけて商売を考えている会社だ

ということを知りましたし、まちづくりは腰を据えてじっくり取り組むことも大事なのだと思いました。地方都市は人口減少や少子高齢化などさまざまな課題を抱えて危機感があるので、どうしても結果を急ぎたいしそうしてしまう。一方で、まちづくりはそれなりの時間がかかるものでもある。自分たちの世代だけでなく、次の世代にいかたちでバトンをおわたすようなことも考えないとうまくいかないものかもしれません。そういう意味でも、現代はさまざまな状況が変わる過渡期にある極めて不確定な時期ですので、状況を見据えながら時間をかけるやり方を模索する可能性もあると思っています。

具体的にいくつか挙げると、まずは北高跡地には能代市の未来につながるような場所、未来への投資となるような施設は確かに必要だけど、公共施設の床面積を35%減らさなければ市の財政が立ち行かなくなるという状況があります。それが何によって、どのように持続させていくのかという議論をやり尽くす必要があります。

次に、公共交通の問題。自家用車の移動ができないと、さまざまな公的サービスを受けにくい状況が地方都市の現状としてあります。車を持っていない人や免許を持ってない交通弱者といわれる人たちは、自由に移動ができません。最近は自動運転などの新技術やMaasなどのサービスが叫ばれている交通の変



革期ですが、能代はどのような公共交通を目指すのかといったことを、技術変革の動向も見据えつつ施設の在り方として考えた方がいいと思います。例えば、もし、能代の大通りを時速30キロぐらいで走るような自動運転のバスが巡回もしくは往復して、歩行とセットで移動を考え、高齢者や高校生以下の子どものための移動の足として使えるようなまちになれば、北高跡地の使われ方も大きく変わるだろうと思います。今までは、公共施設をつくろうとすると駐車場の確保とセットになりますが、そこから自由になれますし、その方が将来を見据えた本質的な施設の議論ができると思います。

つまり、今後の能代市のまちの在り方をなるべく具体的に見据え、中心市街地をどうしていくかという総合的な議論を行政と市民と一緒に考えることからしか、意義ある北高跡地の利活用は生まれません。ではないかとさえ思っています。そうした議論を井上先生と進めていくなかで、北高跡地にあるべき公共スペースの検討方法として「思考継続型プロジェクト」を提案したいと、調査チームとして考えるようになりました。

思考継続型プロジェクトとは、期限を最長10年くらいに定めて、市民と行政が何をつくればよいかを思考し続け、時には実証実験もしながら決定していくプロセスの提案です。最初は最低限のスペースに北高跡地の模型や資料を全部置き、議論の蓄積がアーカイブされていつでもだれでも閲覧できるようにする。例えばカフェや飲食店舗が併設されて市民が日常的に集まれる場所で、この土地、このまちをどうするかを考え話し合う会を定期的開催する。広い土地はあるのだから、必要であれば仮設建築で実証

実験してもいい。10年間ほどのスパンで、開かれたプロセスの実証実験によって能代に最適なものを探っていくことができれば、未来に必要なとされる公共施設を今までにないかたちで生み出すことができると思うのです。民間コンサルではなく、大学に土地の利活用調査を依頼していただいたわけですし、長い時間をかけてしっかり議論を尽くすことに並走することも可能です。

湊さんはじめ民間の方々、能代のまちの未来を想いながら、閉じた商店街のシャッターを次々と開けて新しい活動を展開しています。その流れと並行して、北高跡地には北高跡地とその周辺をみんなで考えていく場があればいい。どこかの会議室で議論をしてもいいのですが、その場所の未来をその場所で考えるのが一番リアルに議論できるように思います。前例のない取り組みですが、自分たちのまちの未来を、しっかり腰を据えて進めていくプロセスが能代市以外の人たちにも伝われば注目もされるだろうし、そうなればさらに多くの人に関わりを持ってくれるようになるのではないのでしょうか。そういう場ができれば素晴らしいですね。いわば、まちづくりのインキュベーションスペースのようなものでしょうか。

一番良くないのは、思考を停止・放棄することや無関心であって、この提案は、思考を継続し未来をつくろうとする前向きな先送りです。行政的なハードルはあるかもしれませんが、初期投資を押さえつつ、未来志向の機運は確実に醸成できます。

折角の機会なので、皆さんにこの思考継続型プロジェクトについての率直なご意見をうかがいたいです。

世代が回らないと、まちへの愛着みたいなものは生まれません。まちへの愛着が根づくには、それぐらいのサイクルが必要な気がします。（松本）

田宮 施設をつくるとなったら5年とか10年ぐらいはかかるし、ひとつの商業施設といっても中に入る業態はさまざまです。物販もあれば、飲食もあれば、サービス業もある。僕は以前いた会社でテナントの誘致を手伝ったりしていましたが、場合によっては病院とかクリニックをリーシングする。僕がやっていたのはもう10年以上前ですけど、こういうことを検討するのに、地味で大変だけど、いろいろなデータを揃えることはすごく大事だと思っています。案件ごとに商圏のエリアを絞りながら国勢調査のデータを見て、どんな年齢のどういう方がどのぐらいいて、消費傾向はどうでといったことを探ります。国勢調査のデータを活用すれば、例えば能代の駅前エリアで15分の徒歩圏を想定したら、その範囲に今、どのぐらいの世代の方が何人ぐらい住んでいて、10年経つとどうなるのか、空き家がどのぐらい増えるのか、子どもはどのぐらい増えそうなのかなどはある程度予測できる。こうした情報は議論する上では必須なんじゃないか。商業とか商店街といっても、物販、飲食だけが商店という捉え方ではなく、サービス業とか、ただの場とか、最近はコインランドリーとか何かを併設した業態も増えています。そうした場に、どういう人がいるのかということ进行分析しながら、その人たちに使ってもらえるような業種、業

態とは何なのかを考えた上で、北高跡地がそれをどう補完していくかという議論になるのではと思います。

松本 北高跡地に限っていうと、地域全体を俯瞰して、地域に最適な答えを出すのがいいと思います。ただ、最適な答えに至るために、じゃあまちとして今後10年、20年どうしていくのかという長期的な考えがあったほうが、その先によりよいまちを残せると思います。幼稚園児から小学生、中学生、高校生となり、その子たちが結婚して子どもが生まれ、また幼稚園児に戻る。世代が1回とか2回ぐらい回らないと長期的な考えとか、まちへの愛着みたいなものは生まれません。まちへの愛着が根づくには、それぐらいのサイクルが必要な気がするんですよね。何がその場所にとって必要なかというのは、場所によって全然違うと思います。だから、能代には能代の歴史的に栄えた背景だとか、いいものがたくさんありなので、そういうところをうまく大事にする。外から新しい人を呼ぶというのはすごく刺激になっていい話だと思いますし、それはそれでやりながらも、現在お住まいの皆さんがいかにかここを好きになって、好きということをちゃんと表せて、それ

北高跡地を切り口にした能代のまちづくりを考える議論を、多くの方が共有可能なかたちで蓄積していくのが重要。それは、能代の貴重な財産になるはずですよ。（井上）

イメージを伝えながら活動してきて、 まちのなかが少しずつ動いてきたなと実感しています。 みんなで土地の価値を上げていこうという方向になって、 長期的に頑張っていけたらいい。(湊)

を子どもたちにもちゃんと伝えていって、いつかは戻ってくるんだとか、ここで頑張るんだとか、そんな考えも必要なのかなと思いました。

井上 これまで能代市にはまちづくりに関するいろいろな勉強会があって、さまざまな重要な意見が出ていたと思うのですが、それが共有できるかたちで蓄積されていないと感じています。また、何かをつくることを目的に議論してしまうと、つくるものが決まった瞬間に、それまでに示されたさまざまな意見が顧みられなくなる。これは話し合いで導かれた結論に種々の意見が収斂されているという考えですね。でも、本当はそんなことではなくて、結論と関係のない意見もたくさんあるはずで、そのなかには能代のまちを考える上ですごく貴重なアイデアがあるかもしれない。実際、この座談会は、北高跡地を切り口にして能代のまちづくりを考える議論に展開しています。そういった議論を多くの人が共有可能なかたちで蓄積できれば、それは能代の貴重な財産になるはずです。なので、議論することを初めからプロジェクトに組み込む。北高跡地について話し合う目的を、何かをつくることから、議論すること、みんなで考えることに少しシフトするというのが重要と考えています。

今回われわれも提案した博物館的な機能というの

は、土地の利活用を考える時によく候補に挙がるプログラムだと思います。ただ、ある調査によると博物館は90年代に一気に増えて、現在は減少傾向にある。うまくいっている事例はもちろんありますが、まちの重荷になってしまう可能性もあるわけです。そんなことを小杉先生と話しながら、思考すること続ける思考継続型プロジェクトというのが出てきました。

湊 商工会の再開発の勉強会では、「どういう建物が欲しいか」という話が出てきた時、おそらく建物に人が入ってにぎやかになるイメージはできて、中心市街地全体に人がいる姿を十分に想像できていなかったと思うんです。その観点からの議論が足り

コミュニティーを広げようと能代駅前イベントを開催



なかった。

井上 地域の活性化について話していても、欲しい施設が議論の主題になると、内部の空間イメージばかりが具体化されてしまい、本来の目的から離れてしまう危険性があるということですね。

湊 一方で、家守舎を立ち上げて実現したいまちのイメージを伝えながら活動していくと、ちょっとずつまちのなかが動いてきたなと、実感しています。例えば今まで空き店舗があって、もうこんな場所は貸せないでしょと思っていた大家さんが気軽に中を見せてくれるようになった。トイレなど一部が壊れていても、知識を持って臨めばあまりお金をかけずに済む物件も見えてきました。家賃が安くて貸してもしようがないよねと思っている大家さんは、とても多いです。老朽化しているし、お金をかけて補修してまで貸せないよねっていう人が多くて。要は、まちに対して諦めている人が多い。でもそうじゃなくて、安いんだったらちょっとずつ、みんなで土地の価値を上げていこうという方向性に10年とか、長期的にみんなで頑張っていけたらいいなと思いました。

現在、商店街の空き店舗を借り上げて、起業者を呼び込む「マルヒコプロジェクト」を進めているので

すが、周りですごく気にかけてくれている人、楽しみにしてくれている人が出てきてくれて。そういうのは今までなかったという話をよく聞くので、地道ですけれど、やらなきゃいけないだろうなと思っています。

足立 田宮さんと松本さんにうかがいたいのですが、まちづくりとか店舗づくりにおいて、長い目で見てどういところが成功と失敗の分岐点だったのか、何か感じられたことはあるでしょうか。ちょっと無理かもしれないと思うけれど、やる気があるからやってみようと思き進んだ人たちにとって、うまくいくかいかいかって賭けになると思うんです。やりたいぞと思っている人がいても、「いや、こっちのほうがいいですよ」みたいに、路線を変えたりしたようなことってありますか。

田宮 僕は「こっちのほうがいいんじゃない?」「こうしたほうがいいんじゃない?」と伝える側の立場から話はしますけれど、それは僕の個人的な話ではなくて、ある程度、客観的なデータなり、経験値からアドバイスするという感じです。

参考になるか分からないですけど、もう10年以上前に東京の自由が丘の商店街の組合にお話を聞きに行ったことがあります。組合で心がけていることを

代謝できる環境があるというのが、すごく大事。
駄目になったら出ていくし、チャレンジしたいと思う人がいれば
入れるような。そういう循環をつくってあげられれば
一番いいだろうなと思います。(田宮)

熱意ある人の熱意が周りに 広がって方向性がひとつになれば、 すごく幸せだと思います。(松本)

聞いたら「特にない」と。「でも唯一気をつけているとすれば、道路の幅員を拡張しないように闘っている」と言っていました。それは多分、商店としての密度感を守るため。それ以外は自然に代謝していくことにある程度任せていると。そうやって代謝できる環境があるというのが、すごく大事なんじゃないかなと思います。駄目になっちゃったら出ていくし、でも、次、チャレンジしたいと思う人がいれば入れるような。そういう循環をつくってあげられれば一番いいんだろうなと思います。

足立 木工の仕事をしていると、アイデアと方向さえ決めてあげれば能代の木工産業は実力と技術は持っているし、物をつくるルートも持っているのもっと伸ばせるという感覚はあるんです。それはあくまでも技術とそれを支える人がいるからなんです。木工に限らずそれ以外の業種でそういったポテンシャルを感じさせるような熱量があるのかなと。

松本 自分でやりたいって人が周りを巻き込む熱意を持って進めないといけないですね。そうじゃないと、うまくいかないわけです。その周りが広がって、みんなそれに賛同し、方向性がひとつになっていけばすごく幸せだと思います。そうなる活動に注目する人も出てきて、経済も含めてうまく循環ができていけばいい。経済がついてこない、

自己満足でただやっているということになってしまいます。

小杉 まちづくりでうまくいっている事例では、必ず、まちに対して情熱を持った人が存在します。行政の方の場合も民間人の場合もあります。みんなが諦めかけても、そのキーマンは絶対諦めずやり続けるような求心力がある人。今の能代でいうとそれは湊さんで、そういう人がいる時に一緒に何かやったほうがいいのかと僕は思います。

足立 オンライン的にも、オフライン的にも人が集まれるような、例えばそこに行けばいつも気軽に、小学生でもZoomで全世界の子としゃべることができる場があるとか、そこに行けば能代市内の小中高生みんなと出会えるとか。他にも何か物事を動かすエンジンになってくれるような人と出会えるとか。そういうものを掘り起こす活動を促進するという意味では、思考継続型プロジェクトに私は賛同します。確かに何らかの施設の整備を検討するには尚早というか、人が出てくるまで掘り起こすための活動の時間が必要かなと思います。

小杉 今までのやり方のプロセスを繰り返したことで現状ができていくわけですから、固定観念を取り払って、やり方を修正していかないと新しいフェーズには行けないと思います。今回の調査を大学に依頼していただく際に、「建物をつくる前提の基礎調査ではなく、土地の利活用をあらゆる可能性から考えたいし、大学に関わる意義はそこにあるだろう」という話を能代市の方々と共有しています。

湊 僕は家具屋なので木のことも関わっているし、いろいろな能代の売りになるコンテンツに少しずつ関わらせてもらっています。いろいろな要望が多分、北高跡地に集中していると思いますし、確かにあったらいいなと個人的に思うものもあります。ただ、そこに全部集めるのがいいのかどうかというのは僕もまだばやとしていて。北高跡地に行ってみると、高台にあって眺めもいいし、本当に駅のすぐ近くなんですね。いい場所になるなとはすごく思っているので、そのイメージを市民の皆さんと共有しながら考えていけたらいいなと思います。

田宮 何かをつくるというイメージはあまり持っていないですけど、むしろどうつくらないかっていうことを前向きに検討できるのいいのかなと思います。小杉先生が秋田駅前を芝生にされているのを目の当たりにして。駅前の一等地にああいう場所を、積極的に何もつくりず芝生の場所をつくった。あの光景は周りにとってはすごく意味があって、人がそこにいる理由をつくってくれたなと思います。何

秋田駅前芝生の広場



かをつくったから人が来るというよりは、来る理由となる何かをつくってあげなきゃいけないと思っていて、そういう居場所とかゆっくりできる場所が能代には少ないという印象はあります。何かそんな居場所、それが建物かどうかはちょっと分からないですけど、そういう場ができるといいのではないかなというふうにぼんやり思っています。

小杉 そういう視点で議論してもらえなきゃいけないというのは本質的にあります。秋田駅前の芝生広場は居心地のよい居場所として設えることで、その場所の機能ははぎ取っているように見えますけど、田宮さんの言うところ、周辺とセットで考えるとすごく意味を持つてくると思います。

田宮 北高跡地についての話し合いは単体だけの議論ではなく、周りとの関係性とか、どこにどう影響するのかという話とセットだと思います。小杉さんがおっしゃっていたような無人の巡回バスとか、何か新しいビークル（輸送手段）をつくってほしいという気はします。

小杉 都市計画やまちづくりは交通とセットで考えるべきものです。「自家用車がないと生きていけない」というふうに思考停止しちゃうと、未来のまちづくりの可能性はとても狭まってしまうことに気づくべきです。

田宮 人口がどのぐらいのスピードで、どのぐらい高齢化していくかっていうのは分かると思うんです。車の台数もある程度読めると思う。そうした時

に、新しいピークルが必要だよねという議論はあるんじゃないかなと。

小杉 能代は幹線道路の幅がすごく広いじゃないですか。昔のようにもうちょっと道幅が狭いほうがヒューマンスケールでまちなみとしてはいいのという話がよく出るのですが、それは能代大火などの歴史的な経緯や理由があつての現状でもあるので、今さらそれを話してもしょうがなくて。むしろそうした歴史的経緯も受け入れた上で未来を考えた方がいいかもしれません。道幅が広く車線がいっぱいあるんだから、歩道側の1車線は自動運転レーンにして、能代の人の生活を支えるための広い道路として活かせれば、広い道路幅にも新たな価値が生まれるのではないかと井上先生と話していました。交通が変わることでまちなかで人が動き出すと、経済も含めていろいろなものが変わるの間違いありません。現状のまちづくりは運転のできる人たちが決めていることが結構多いですが、交通弱者を含めた多様な人たちの意見をどれだけ吸い上げられるか。そうした議論の場が動き出し広がれば、10年後の能代のまちはかなり変わるだろうと思います。

足立 何が必要かって、私は居場所とっていて。人が集まれる場所がまちなかにあるということが、みんなにとっては安全・安心なまちになるのかなと

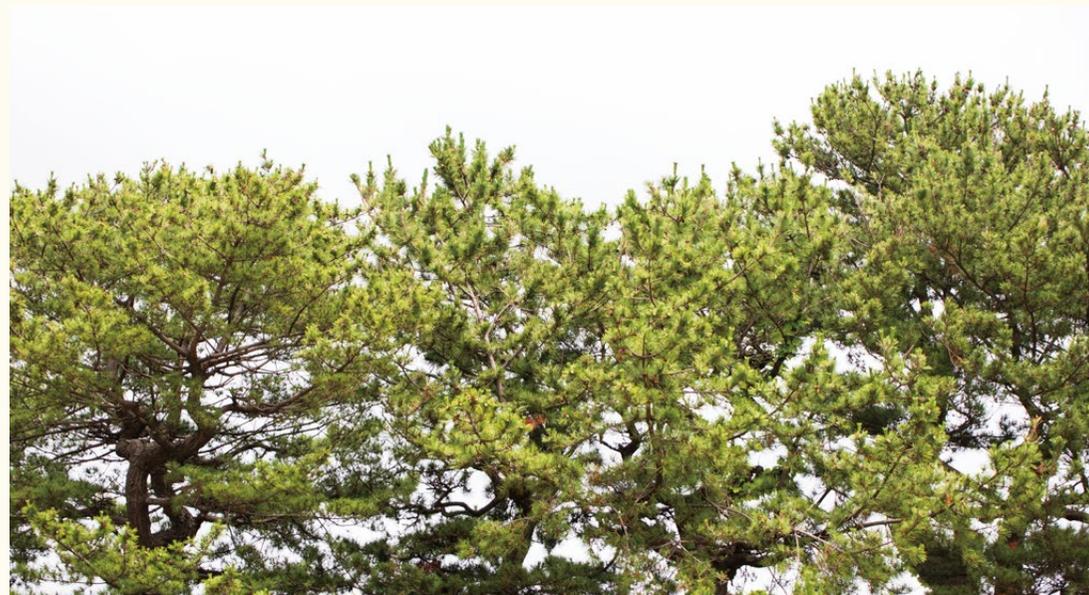
思います。避難所でも、防災を含めた広場でもいいです。私は秋田に来て一番好きなのは、空のきれいさだったり、高さだったりするので、能代で一番高くて広いところで大きな青い空が見られるんだしたら、それでいいかなと。そういった意味で空間の自由度を持たせる、使う人が自由にアレンジできると考えると、本当に芝生でもいいかなというふうに思います。

あと、森にしちゃってもいいと思いますね。能代って産業はありますが、森がないんですよ。故郷という皆さんいろいろな場所を思い浮かべられるかもしれませんが、僕は能代と聞いて思い浮かべるのは空なので、何か象徴的な風景みたいなものがひとつ生まれるような場所であるといいなと思っています。全然、研究者的な意見ではなくて、一個人としての意見ですけれど。

小杉 実は秋田駅前の芝生広場の最初のイメージは森でした。秋田駅を降りていきなり森があったら、そこを訪れた人はみんな感動するよねと。能代駅のすぐ近くにこんもりとした森があると、インパクトはありますよね。市民がそこで憩う風景は素敵だと思います。

松本 以前、能代市役所にお邪魔した時に、木をふんだんにお使いになっていて、さすが能代の市役所

秋田に来て一番好きなのは、秋田の空のきれいさ、空の高さ。能代で一番高くて広いところで、大きな青い空が見られるんだしたら、それでいいかなと。(足立)



だなと思いました。が、まちなかで木を感じるところというのが正直あまりありませんでした。湊さんが今されているような、木の復活。コンテンツというちょっと軽い言葉かもしれませんが、能代にはいい歴史があるので、もう少しとんがった木のまちみたいな方向性もあるのではないのでしょうか。もう何でも木、モビリティも木でつくっちゃうみたいな。それはちょっとふざけていますが、まちでそんな話になっていくのもとても面白いんじゃないかなと思うんです。ここは東北における木材産業の一大集積地なわけですよ。木のまちであることがぐっとくる何かがあると面白いですよ。いずれにしても時間はかかる話だと思うので、少しずつまちの皆さんが問題意識を共有して、仲間が増えていって、

それが大きな声になっていく流れがうまくできていけばいいなというように思いました。

小杉 今後予定されている北高跡地のワークショップは市民主体になると思いますが、その皆さんには、こうした客観的な意見があつたというのを知ってもらった上で参加してもらえるといいのかなと思います。能代の未来のために北高跡地をどのように活用していくのか、その周辺も含めて考えていかなければならないし、それを従来とは違うレベルで議論できたらと思っていますし、そのための多くのヒントを皆さんからいただけたと認識しております。どうもありがとうございます。

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School
and the future of Noshiro City



尾道駅（広島県尾道市）

7 | 駅、商店街、公道活用の取り組み事例

北高跡地利活用の検討にあたって、国内において参考となる利活用事例を収集し、施設のコンセプトや機能、利活用に至る経緯等の把握・整理を行いました。「商店街の活性化」「駅を中心とした活性化」「公道を活用した活性化」の視点から現地調査を行い、そのなかで特に印象に残った6事例について紹介します。

▼商店街の活性化事例

民間のまちづくり会社を中心に施設の運営、イベント開催などの事業を展開している油津商店街（宮崎県日南市）、商店街のアーケードを改修してその空間特性を生かしたデザインによって魅力を引き出し、商店街の活性化を図っているとおり町 Street Garden（広島県福山市）

▼駅を中心とした活性化事例

中心市街地のにぎわい拠点として駅舎前に建築した複合施設をはじめとした駅周辺を整備し、さまざまな市民活動が共存することを意図した設計・運営が行われている延岡駅（宮崎県延岡市）、しまなみ街道が「サイクリストの聖地」であることを活かし、自転車利用者を中心に整備した尾道駅（広島県尾道市）

▼公道を活用した活性化事例

「歩いて暮らせるまち松山」を目標に整備した花園町通り（愛媛県松山市）と、2車線と停車帯で構成されていた車道を1車線として歩行者環境を創出した葺合南54号線（兵庫県神戸市）

1

あぶらつ 油津商店街

「商店街」の活用化事例

人材への投資で、商店街に にぎわいをもたらした成功事例



商店街活性化の成功事例として取り上げられることの多い油津商店街は、「猫すら歩かない」といわれるほど閑散としていた商店街に、2013年からの4年間で20軒以上の新たな店舗・企業を誘致したことで知られています。成功へと導いた中心的な人物の一人が木藤亮太さんです。木藤さんは、商店街活性化を担う人材を募る全国公募によって、333名のなかから選ばれました。日南市が月90万円で委託するという条件も話題となりました。ハードではなくこうした人への投資が、まちを動かしていった事例といえます。

現地を訪れると、老朽化した商店街のなかに改修によって生まれ変わった店舗や多世代交流拠点といった建物を見ることができます。八百屋を改修した拠点施設「Kado」の1階は、無料でレコードを聞くことができるコミュニティスペースとして開放されていますが、音楽を楽しむ人だけでなくスマホゲームに熱中する子どもの姿もありました。「ABURATSU GARDEN」はスイーツ店やパン屋、子ども服店などが入居する6つのコンテナからなる施設ですが、中庭に喫煙スペースが設けられていました。店の内容を考えると設置の必要性に疑問を感じましたが、商店街の利用者層を考慮した結果なのかもしれません。こうした地域の実情に応じた地に足のついた商店街のリノベーションが強く印象に残りました。



角地に立つ青果店を改修したレコードコミュニティ「Kado」



「Kado」の1階はレコードが無料で聴けるコミュニティスペースとして開放



地場産材の珩肥杉が使用された「油津Yotten (よってん)」は、油津商店街の多世代交流拠点として生まれたスペース



多世代交流拠点のオープンスペース



「ABURATSU GARDEN」は6つのコンテナにカフェなどの店舗やオフィスがテナントとして入っている



喫煙スペースが設けられた「商店街のお庭」

2 とおり町 Street Garden

「商店街」の活用化事例

アーケードの記憶を継承した 空間デザインが、にぎわいを創出



広島県福山市の中心部に位置する本通・船町商店街は2016年にアーケードを撤去し、開放感のある新しい商業空間としてリニューアルされました。デザインを手がけたのは建築家の前田圭介さん。アーケードの記憶を継承しながら、「歩く喜び」を感じられる公園的なストリートスケープ」を構築しました。

歩いてまず目に止まるのは、アーケードの代わりに設置されたステンレスワイヤーです。上空に架けられた7,000本にも及ぶステンレスワイヤーは、鉄柱の周りに植えられた樹木と相まって商店街に統一的な表情を与えています。レースのように風になびいて、高圧電線の存在を和らげる効果もあります。

商店街を北に進むとレトロな雰囲気を醸し出す大黒町商店街が目飛び込んできます。ここもアーケードのない商店街で、本通・船町商店街の現代的なデザインとの対比によってその個性がより際立っていました。

これらの商店街からは、その場の特性を活かして他の地域にはない空間的な魅力を創出することで商店街を活性化しようとする意図が読み取れます。実際、本通・船町商店街ではリニューアル後に通行人が増加し、空き店舗は1/3以下まで減少したそうです。利便性や機能性だけでなく、空間的な質を高めることがまちのにぎわいを生み出した好例といえます。



ステンレスワイヤーと樹木からなる公園的なストリートスケープ。
江戸時代から400年以上続く本通・船町商店街に約30年前につくられた
アーケードの改修プロジェクトは、2017年度のグッドデザイン金賞を受賞



レトロな雰囲気が漂う大黒町商店街



上空を覆う7,000本ものステンレスワイヤー

3 のべおか 延岡駅

「駅」を中心とした活用化事例

公共交通利用者と市民活動が混合する さまざまな人の「居場所」



宮崎県のJR延岡駅は、中心市街地のにぎわい拠点として、複合施設エンクロスや、駅前広場・東西自由通路・跨線橋などの施設が一体的に整備されています。設計は、2011年に開催された延岡市主催のデザイン監修者選定プロポーザルにて選ばれた乾久美子建築設計事務所が担当しています。乾さんは、駅と商業施設というよく見かける組み合わせではなく、駅と市民活動という組み合わせを意識した空間をつくっています。これは、商業施設を排除するというのではなく、人の居場所を支える商業施設の在り方を考えるもの。従来の機能的なゾーニングに捉われることのない、公共交通利用者と市民活動が混合する空間を目指しています。実際にエンクロスでは、物販と図書スペースや打ち合わせスペースといった種々の機能が重なり、複数の小さな市民活動が共存できるように運営されています。公共交通機関の待合機能以外にも、読書やカフェ、趣味や子育てなど、さまざまな目的に合わせて利用することが可能な施設として生まれ変わった延岡駅の空間から、交通結節点として人が集まる駅にこそ、さまざまな人の居場所をつくることの大切さを学ぶことができます。



駅舎と同程度のボリュームとなるように建てられた公共複合施設「エンクロス」。延岡の「延（えん）」と人と人との「ご縁」をかけ、たくさんの人が出会い、縁を交差させ、行き交う場所となることを願ってネーミングされた。



東口駅前広場も一体的に整備

さまざまな活動が混合する内部空間

4

おのみち
尾道駅

「駅」を中心とした活用化事例

「サイクリストの聖地」を活かして、
新たな魅力を創出



JR西日本が進める、地域と一体となって新たな魅力を創出する「せとうちパレットプロジェクト」のひとつとして、2019年に尾道駅が建て替えられました。「繰り返し訪れたくなる一大周遊エリアに」という目標のもと誕生した駅舎は、駅前広場とコンコース、ホームがダイレクトにつながる構成です。

設計を担当したアトリエ・ワンが目指したのは、「日常的な駅利用者からサイクリスト、外国人旅行者、勉強をしに集まった地元の学生、そして散歩がてら立ち寄った地域住民まで、人々が気軽にいられるような」駅。延岡駅と同様に、人の居場所をつくり出すことが設計の主題になっていることが分かります。

ここで特徴的なのはサイクリストの存在です。尾道市は「サイクリストの聖地」と呼ばれる「瀬戸内しまなみ海道」の本州側の起点でもあります。駅の近くには、荷解き専用倉庫を改修した複合施設ONOMICHI U2があり、サイクリストを想定したホテル、レストラン、サイクルショップなどが入っています。

しまなみ街道を活かしたまちづくりが進められている尾道ですが、新型コロナウイルスの影響で、2021年1月までに尾道駅の全テナントが撤退する事態となりました(2021年9月現在、1Fには新たなテナントが入居)。丁寧にプロジェクトを進めていっても、時として予測不能な事態に直面するまちづくりの難しさが痛感されます。



3層構成の大屋根が印象的な、ホームから駅前広場まで直線的につながる尾道駅。
大屋根の開口部は眺望デッキになっており、尾道水道の景観を楽しむことができる



海辺の荷解き専用倉庫を改修した複合施設「ONOMICHI U2」



客室に自転車をもち込める宿泊施設「HOTEL CYCLE」

5

はなぞの 花園町通り

「公道」を活用した活性化事例

公民学が連携して進める 良質な公共空間の実現



松山市の中心市街にある花園町通りは、「歩いて暮らせるまち松山」を目標とした整備事業において、シンボルロードとして位置づけられています。「賑わいと交流を育む『広場を備えた道路』」をコンセプトに、歩行空間には県産木材を使用したウッドデッキ・ベンチといったストリートファニチャーが設置されています。自転車道も整備され、駐輪スペースと歩道を分ける木製ルーバーといった景観への配慮が随所に見られます。こうした歩道や自転車道は、もともと片側2車線だった車道を1車線に縮小し、それによって生まれた空間を再配分することで実現しました。松山市では公民学が連携するまちづくり組織「松山アーバンデザインセンター(UDCM)」が設立され、関係者協議や社会実験による効果検証など、長期間にわたるプロジェクトの推進に大きな役割を果たしています。花園町通りにはUDCMの拠点である「もぶるラウンジ」があり、誰でも整備事業の概要や中心市街地の将来ビジョンを知ることができます。もぶるラウンジは2019年まではUDCMが松山市中心市街地賑わい再生社会実験事業の委託業務として運営し、2020年からは自主事業に切り替えて運営しています。実験的なプロジェクトを試行しながら、着実にまちづくりが進められています。



車線の縮小によって生まれた空間を、ストリートファニチャーのある休憩スペースや駐輪場として活用



景観に配慮した歩道・自転車道・車道の分離



整備事業やまちの将来像を知ることができる「もぶるラウンジ」



6

ふきあい

葺合南54号線

「公道」を活用した活性化事例

車中心の空間から、人と車が共存する空間に姿を変えたまち



神戸のまちや経済全体を活性化させるために、現在、玄関口である三宮周辺地区の再整備が進められています。そのひとつとして実施されたのが葺合南54号線を対象とした「道路のリデザイン」です。葺合南54号線は三宮の駅とウォーターフロントを結ぶ道路で、都心部の主要道路のひとつです。この都心部に位置する道路が、愛媛県松山市の花園町通りと同様、車中心の空間から人と車が共存する空間へと変貌しました。

もともと2車線と停車帯で構成されていた車道を1車線のみとし、新たに生まれた空間を歩行空間として再分配。拡張された歩道部分にはベンチや植栽、花壇等が配置され、人が滞留する場が生まれています。

歩道沿いにはカフェや飲食店が並び、店で買ったコーヒーを歩道のベンチで飲みながらくつろぐといった人々の様子が容易に想像できます。整備の効果を最大化するため、個々の事業で完結するのではなく、プラスの連鎖が起きるような空間的な仕かけがプロジェクトから読み取れます。



車線を縮小して歩道を広げる道路空間の再配分によって生まれたスペースに、植栽やベンチを設置した「道路のリデザイン」。歩行者の快適性を向上させ、滞留を生み出す新たな都市空間を実現



新たな歩行空間を演出する植栽



人の滞留を生むストリートファニチャー

8

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirohta Senior High School
and the future of Noshiro City



8 | これまでの意見

能代市に対してはこれまで、さまざまな施設整備の要望が提出されてきました。民間団体が独自に活用計画を作成するなど住民の関心が高いことがうかがえます。そういった要望や北高跡地に関するアンケート結果などを集約するひとつの方向性を抽出することは困難ですが、教育・文化施設設置への期待は相対的に高いといえます（p25参照）。その他、平成23年度には、時限的組織であった山本地域振興局能代まちづくりプロジェクトチームによって、北高跡地を含めた能代駅前の整備計画や畠町通りの再編が提案されています。

基礎調査では、こうした北高跡地に求められるニーズを整理した上で、北高跡地に関連する能代市の動きを把握するため、関係各課へのヒアリング調査を行いました。これらから、北高跡地のみで完結する施設ではなく、周辺の施設と連携して中心市街地を中心とする能代市全体の活性化へとつながる施設計画が望ましいこと、そして関係各課が中心市街地における課題や活動状況等を共有しながら、今後、効果的・効率的な検討作業が行えるように連携していくことが重要であると考えます。

議会陳情採択	平成18年12月歴史民俗資料館／平成18年12月美術展示館／平成31年3月歴史民俗資料館と美術展示館の機能を併せ持つ施設
民間団体	平成29年10月バスケットボール専用アリーナ（専用体育館＋宿泊施設）

北高跡地に関連する能代市の動き

北高跡地の利活用を考えることは、その立地的特性から、将来の能代のまちの在り方や中心市街地の活性化などと密接に関わってきます。そこで、これらの検討を主に所管する都市整備課、中心市街地活性化室にヒアリングを行い、最新の動向を把握した上で、今後の検討課題を整理しました。

都市整備課

[能代市のまちづくりの方向性を示す新しい計画を策定中]

都市整備課では、平成22年3月に策定した「能代市都市計画マスタープラン」の見直しと「立地適正化計画」の策定を進めています。「能代市都市計画マスタープラン」は長期的視点に立った都市の将来像を示すもので、居住や公共交通等、さまざまな都市機能の誘導を図るものとなります。両計画については、市民アンケート、ワークショップ、策定委員会等によって市民の意見を十分に反映させ、能代市都市計画審議会の審議を経て策定されます。

検討課題

この2つの計画は、北高跡地の利活用を考える上で最新の計画となります。市民の声が反映された両計画が示す将来像に、北高跡地がどのように貢献できるかという視点での検討が今後は必要となります。

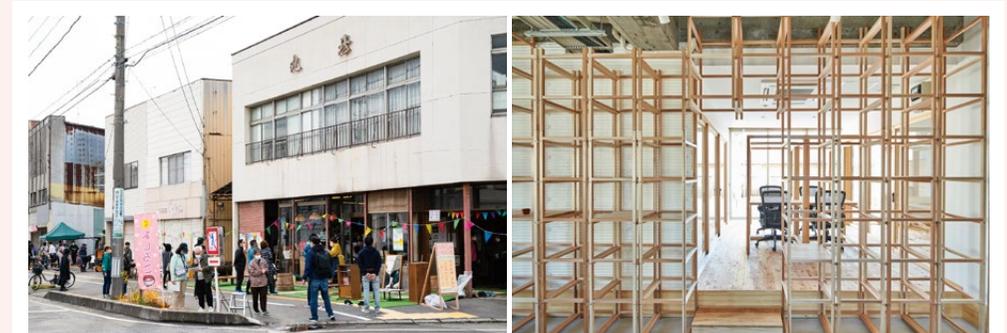
中心市街地活性化室

[商店街の空き家を活用する動きが活発化]

「中心市街地活性化計画」では、商店街の活性化、利便性の向上、効果的な情報発信などを課題としています。策定にあたっては、「中心市街地の活性化のために」という視点だけでなく、能代市全体を考えようという意見もあり、そうした見地からの検討も反映されています。計画策定後には商店街の空き家を活用する動きが生まれるなど、中心市街地での活動が活性化しつつあります。

検討課題

「中心市街地活性化計画」は、北高跡地の利活用と関連性の高い計画です（p24参照）。実効性の高い利活用案の検討にあたって、中心市街地で活発化しつつある種々の活動と連携することは、効率的・効果的な検討手法といえます。



「のしろ家守舎」は、かつて酒屋だった「丸彦商店」の建物をリノベーションし、子どもの遊び場やカフェ、コワーキングスペースなど多世代が集まれる場所にしようと活動しています。

9

これから、ここから

From here and now

The former site of Noshiro City Senior High School
and the future of Noshiro City



9 | 北高跡地の可能性

関連計画の整理や国内事例の現地調査、ヒアリング調査によって把握した北高跡地の位置づけや立地条件、ニーズ等を踏まえて、北高跡地利活用基礎調査チームでは将来的な利活用の方向性や周辺への展開可能性を検討しました。

北高跡地は歴史的・地形的な特異点である一方、これまで要望されてきた機能は多種多様で、利用者が幅広く想定されています。アンケート結果や議会陳情においては、教育・文化機能のある施設が望まれていることが確認されました。ただ、いずれも能代市の公共施設は将来的には延床面積を35%削減する目標が設定される厳しい財政状況であることが考慮された要望とは必ずしもいえない状況です。そこで調査チームでは、2つのケースを設定しました。恒久的な施設を建設する場合と、仮設建築物を一定期間設置し、北高跡地の利活用を検討しながら施設を増改築する場合です。この2つについて、それぞれ想定される建築用途や施設のコンセプトを検討しました。

所在地 : 秋田県能代市追分町48、元町25-1 (地番)

敷地面積 : 18,713.0㎡ (登記面積)

用途地域 : 近隣商業地域

建蔽率 : 80%

容積率 : 400%

防火指定 : 準防火地域

高度指定 : 指定なし

日影規制 : 指定なし

道路幅員 :

【東側】 県道富根能代線 (中和大通)

／幅員18.0m

【西側】 若松町・柳町線

／幅員5.0m~8.0m

【南側】 追分町・通町線

／幅員9.3m~9.7m

Case 1

恒常的な施設を建設する

地域の文化経済を底上げする新しい公共文化施設プログラムの提案

想定される建築用途：博物館・図書館／店舗・飲食店／事務所／集会施設

基本コンセプト

Concept

- 能代の歴史・文化・地理等すべての資源・情報を並列に扱う博物館的機能を有する複合施設
- 可変可能な展示手法を採用し、コンテンツを並べ替えることで能代市をさまざまな視点から表現、説明できる場

リカレント教育を絡めた更新可能な博物館的施設

従来の博物館のように分類・固定された展示ではなく、可変的で、さまざまな組み合わせが可能な新しい博物館的施設を考案。内容を更新しやすい展示とすることで持続的な利用を促すことができます。リカレント教育※と絡めることで子どもたちへの投資や高齢者の活動の場となり、さまざまな世代が学ぶ場ともなり得ます。また、大学や研究施設、宇宙科学研究所のサテライト拠点を組み込むことで民間企業とのマッチングの場となり、新たな事業展開が期待できるほか、学生をはじめとする若い人がまちの中心部に滞在することで活性化への貢献も予想されます。

このように特定の機能に対応する固定的なゾーニングによる施設計画ではなく、能代に関するすべてのものを展示のコンテンツとして取り扱うという、多種多様なものを受け入れる流動的な施設形態にすることによって、さまざまな人がそれぞれの関心に基づいて施設を利用することが可能となり、交流を促進する施設となります。

※リカレント教育：学び直し、生涯学習ともいわれる「学び」を広くとらえた言葉

Case 2

一定期間、仮設建築物を設置し、検討しながら施設を増改築する

中心市街地の活性化に向けた気運を醸成する思考継続型プロジェクトの提案

想定される建築用途：店舗・飲食店／事務所／集会施設（仮設的で最小限の規模）

基本コンセプト

Concept

- 能代のまちづくりのためのIncubation施設※(孵化装置)
- ビジネスや起業だけでなく、教育+自己表現のための場

思考し続けることを目的としたIncubation施設

これまでの北高跡地に対する検討過程において、能代市のまちづくりにとって示唆に富む意見交換がなされていた可能性があります。Case2は、こうした現状を最大限に活かし、北高跡地に対する議論を促進することを目指した提案です。

会議やワークショップが可能なスペース、模型や図面など北高跡地に関する資料の展示スペース、議論を活発化する飲食施設を仮設的な建物として最低限の規模で近接して整備。世代に関わらず、誰もが気軽に立ち寄れる施設配置とすることで北高跡地への関心を高め、利活用の検討をきっかけとしたまちづくりに対する気運が醸成していくことを目指します。

※Incubation施設：インキュベーション(Incubation)とは「(卵などが)孵化する」という意味。創業初期段階の企業、これから起業を目指す個人などスタートアップを目指す企業や個人、新しい活動をする人をサポートする施設のこと。事務所スペースを低廉で提供したりマーケティングのアドバイス、経営ノウハウの提供などによって立ち上げを支援し、発展につなげることを目指します。

10

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School
and the future of Noshiro City



10 | 思考継続型プロジェクトの提案

公共施設の整備において、計画段階からライフサイクルコストを考えることはとても重要です。ライフサイクルコストとは、「建物のライフサイクルに要する総費用」のことで、建設費だけでなく、日常的な維持管理にかかる費用や大規模な修繕費などが含まれます。施設を新設する時には、その建設費に目がいきがちですが、ライフサイクルコストにおいては通常、建設費以外の費用が建設費の何倍にもなります。よって、能代市では2047年までに公共施設の延床面積を35%削減する目標があることを考慮すると、新たな施設を適切に維持管理していくには詳細なライフサイクルコストの検討が必須です。この削減目標には新設する施設は見込まれていないため、計画上は北高跡地の整備費用を充足する収益の確保や、新築する延床面積分を他の公共施設でさらに削減するといった事業計画も求められます。しかし、収益施設を文化的施設の一部として計画するのは簡単ではなく、また、他の公共施設の床面積を削ることは中心市街地外での公共サービスの低下を招くことが予想されるため、多くの方に同意を得ることは難しいでしょう。

このように、教育・文化施設を中核とする複合施設の整備を前提とした検討を急いで進めることは、能代市の財政に大きな負荷を与える結果になると考えます。そして、その負荷の大部分は子どもたちが背負うこととなります。加えて、「中心市街地活性化計画」のアンケート調査から、早急な施設整備は望まない住民が一定数いることも明らかとなっています。そこで能代北高跡地利活用基礎調査業務では、Case2の「一定期間、仮設建築物を設置し、検討しながら施設を増改築する」ことを軸に活用方策を検討しました。

まちのIncubation施設（孵化装置）

能代北高跡地利活用基礎調査チームが検討した活用方策の基本方針は、「一定期間、仮設建築物を設置し、検討しながら施設を増改築する」こと。中心市街地の活性化に向けた気運を醸成する思考継続型プロジェクトの提案です。

思考継続型プロジェクトの基本コンセプト

- 能代のまちづくりのための Incubation 施設(孵化装置)
- ビジネスや起業だけでなく、教育+自己表現のための場

想定される建築用途 // 店舗・飲食店/事務所/集会施設(仮設的で最小限の規模)

多世代交流を促進する場の構築

自分たちのまちをどうするか、子どもたちにどのようなまちを残すのかを大人はもちろん、未来の当事者である子どもたちも一緒に考えていくには、地域住民が日々集い、活発な議論を進めるための場が必要です。例えば、北高跡地にカフェ（飲酒も含めた飲食）機能を持った空間を用意し、跡地利用を検討するための模型や資料などを並べることで、日常的な議論を促進することが可能になると考えます。

利活用の機運を醸成するイベントを開催

小規模な拠点施設が設置されれば、さまざまなイベントを行うことが可能となります。例えば大学や行政主導の勉強会やレクチャーを定期的で開催することで、北高跡地や能代市の財政状況への理解が深まり、より実効性の高い議論を行うことができます。公共交通や商店街の在り方なども住民と一緒に考え、研究することで、最低限の経済的リスクで未来の能代にとって最大の効果をもたらすものを考案できます。

新しい交通体系の検討

交通関連は、自動運転やICT、IoT技術の革新などによる大きな変革期に差しかった過渡期にあります。従来のように大きな駐車場を備えた施設モデルの有効性については、再検討する時期にあります。人の移動とまちの将来像は一体的に検討すべきことで、新しい交通関連技術の動向に注視しながら、能代市に適した交通体系を想定した計画が必要だと考えます。

思考し続けること、 議論を蓄積することを目的とした プロジェクトの推進

従来型の計画のようにマスタープランを早急に作成することは、その後はただ遂行するだけという思考停止を生み出す危険があります。住民が主体となって思考し続けることをテーマにすれば、直面する課題を契機として長期的な視点に立った能代のまちの在り方を考えることが可能となるでしょう。そこで行われたさまざまな議論は蓄積され、提案内容によってはその有用性を検証するための試行的な実践を行うこともできます。議論や活動の蓄積は、未来の能代の在り方の検討に貢献する貴重なアーカイブともなるでしょう。これはいわば、「思考し続けること」をテーマにした10年計画の実証実験でもあります。



これから、ここから。
From here and now

将来につながる、持続可能なプロジェクトを継続していくこと、思考し続けていくこと。

能代北高跡地利活用基礎調査チームが動き出して1年余り。プロジェクトの経緯と経過、これからの可能性について調査チームの3人がクロストークしました。(2021年7月28日)

■ 能代北高跡地利活用基礎調査は、秋田公立美術大学の景観デザイン専攻が業務にあたりました。メンバーは小杉栄次郎(業務代表)、井上宗則、船山哲郎。業務のコーディネートはNPO法人アーツセンターあきたの田村剛が担当しました。秋田公立美術大学は、令和元年度から中心市街地の空き店舗、空き家、空きスペースの今後の可能性を探る実証実験「能代街なか資源再活用プログラム研究」に取り組んできました。これは、大学、能代市、地域の企業が連携して、かつて本屋として親しまれた旧鴻文堂を高校生をはじめとする若者の居場所に生まれ変わらせるプログラムです。能代市と秋田公立美術大学が連携してプログラムを進行していきなかに話が上がったのが、更地となった「北高跡地」についてでした。

「北高跡地」という空きスペースを、どう利用するか

小杉 能代市畠町の旧鴻文堂空き店舗スペースを利活用し、高校生を中心とした若者の居場所に変えようという「能代街なか資源再活用プログラム研究」プロジェクトに、令和元年度からこのメンバーで取り組み続けています。その関わりの中なかで、県から能代市が譲渡を受けた旧県立能代北高校跡の広大な空き地があることを知りました。能代のまちを一望できるような見晴らしのよい高台にある広大な敷地が、能代駅のこんなにもすぐ近くにあるなんて！と驚いたことを覚えています。ご案内いただいた能代市役所の方には、この土地に公共施設をつくり、中心市街地活性化の起爆剤にしたいと考えていること

や、再活用のための基礎調査業務に取りかかる予定であることなどをお聞きしました。その話の中なかで、さまざまな団体や庁内各課からの要望案なども出てはいるものの、それらを足し合わせた複合施設にするだけでよいのかというような不安もお持ちのようでした。現在さまざまな課題を抱える能代市として、今まで通りの計画プロセスを踏襲するだけでは未来につながるプロジェクトはできるのだろうか、という悩みのように私は受け止めました。

発注者と受託者ではなく、一緒にプロジェクトをつくるパートナーとして、通常の開発案件とは違うかたちに

小杉 その後、能代市の方とやり取りをするなかで、今回の基礎調査を民間の建設コンサルタント会社ではなく大学に依頼することは可能なかどうか尋ねられました。私からは、もし大学で取り組むのであ



能代街なか資源再活用プログラム研究



小杉栄次郎
秋田公立美術大学景観デザイン専攻教授

れば、民間がする一般的な、想定された機能・規模の建築を前提とした基礎調査ではなく、プログラム開発をするところから能代市と一緒に時間をかけて取り組むことができると申し上げました。発注者と受託者というよりは一緒にプロジェクトをつくるパートナーとしての関わり方が可能だし、そうした開発プロセスからは通常の開発案件とは違う新しいものが提案できるのではないかと思ったからです。このような経緯があり、秋田公立美術大学に北高跡地利活用基礎調査業務の依頼をいただき、このプロジェクトが始まりました。ただ、そうは言ったものの、最初は具体的な利活用のアイデアはなかなか浮

かびませんでした。

新しい跡地利用の考え方を

井上 「北高跡地」は駅に近く、周辺よりも地盤が高い。簡単にまちのランドマークになれるような土地のポテンシャルがあるなと思いました。ただ、小杉先生と同じように、僕も具体的なアイデアが出てこなかった。用途を限定する厳しい前提条件があるわけでもないのに、やろうと思えば何でもできちゃう。それがこれまで決定的な整備方針が打ち出されてこなかった理由のひとつなのかなとも感じました。僕は建設コンサルタント会社にいたことがありますが、土地利用の検討手法は、ある程度定型化されている部分があると思います。ただ、そういった手法を北高跡地に用いてもうまくいくイメージが湧かなかった。この場所では、新しい跡地利用の考え方を見つけないと難しいのではないかと。そういった意味では、基礎調査を大学として実施する意義はあると思います。北高跡地の現況を考えると、大学

という研究機関にとって十分チャレンジのしがいのある案件だなと感じます。能代市からはそういったことも期待されているのだと思いました。

起爆剤ではなく、将来につながる持続可能な何かをここで

船山 僕は生まれは能代市で、3歳ぐらゐまでしか住んでいませんでしたが、年に数回は能代にある祖母の家を訪れていました。小学校の高学年の時には、盛岡から電車に乗って遊びに行ったこともありました。電車で能代駅に着いて、祖父が迎えに来てくれて散歩した時に、そういえばここに高校があったなという記憶があります。

北高跡地は本当に駅から近いし、いい場所ではあるのですが、跡地自体にノーアイデアの雰囲気漂っているなと思います。中心市街地活性化の起爆剤ではなく、将来につながる持続可能な何かができるかという点で先生方と一緒に考えていました。更地になってから実際に行ってみて寂しい気持ちにはなりませんが、北高跡地から景色を眺めたことがなかったので、むしろ新鮮に見えました。

公共施設の延床面積を35%~50%減らさなければ維持できない

井上 このプロジェクトを始めるにあたって、まず北高跡地に関連する計画の整理を行いました。すると能代市の公共施設は、財政上2047年までに床面積を35%減らさなければならないことが分かりました。公開されている報告書には、現状のままでは



50%減らさなければいけないが、それでは行政サービスが急激に低下するので、維持管理費を下げる工夫をした上で35%減らさなければならないとはっきり書かれています。これは我々にとって、かなりインパクトのある数字でした。多くの公共施設を削減しなければいけない状況で、何か新しい施設をつくることができるのかと。少なくとも何かをつくるならば、その時はつくる意義を多くの人が納得して、決意をもって進めないといけない。そういった気運を醸成しながら有効なスキームを導き出すには、それなりの時間がかかるのではと思いました。能代市の関連計画を見ていて自然とそういう思いになりました。

戦略的な未来への投資で時間をかけて、まちを変える

小杉 今までの文化施設は、基本的に税金によって維持管理されてきました。しかし今後は、そういうやり方は難しくなる一方です。だとすると、その施設

設はお金を儲けるようなものであるか、あるいは未来への投資となるような施設でなければならないと思うのです。最近では、民間の蔦屋書店とスターバックスが併設された公共の図書館のように、お金を稼ぐ公共施設もあります。そういうかたちで、実際に飲食や店舗が売り上げていく。あるいは長期投資として、人材を育てるという考え方もあるかもしれません。その施設で育った人材が、将来能代でまた何かを生み出していく仕組みがもしできれば、市としては最大のリターンです。このような未来への戦略的な投資という視点がとても重要だと思います。本来、文化施設とはそうした役割を担っているものでもあったはずなのですが、そこをきちんと意識したいという話をしています。

井上 やっぱり「人」が重要なんですね。今回、参考になりそうなくつかの事例について現地調査を行いました。そこで印象に残ったのが、小さなプロジェクトを積み重ねながらまちが変わっていく姿でした。厳しい状況下でも、時間をかけて話し合っ、やる気ある人が増えていくと確実にまちはよくなっていくんだなと勇気をもらいました。

施設ではなくプロジェクトとして、そこで活動を展開する

船山 井上先生の調査結果を見た時に、能代市には市民の生活に必要なほとんどの施設があると思いました。市民の要望に応じて足し算的に新たな施設を北高跡地につくるイメージだったと思うんですけども、結局、要望って消費されてしまう。現在ある



船山哲郎

秋田公立美術大学景観デザイン専攻助手

文化施設がうまく維持されていない背景には、過去の要望に応えるかたちで整備されたものの、今はもうそれが消費されてしまい、そしてただ老朽化が進んでいるということがあるのではないかと思います。そういうことではなく、要望と要望の隙間に根を張っていくような感じの持続的なこと。施設というよりはプロジェクトとして、何かがそこで展開されるべきだろうなと思いました。

「教育」をテーマにした仕組みと、あらゆるものを集めた博物館

小杉 美術館や博物館のような施設の場合、開館当初には集客力があっても、来館者はどうしてもだんだん減っていきます。ですので、集客動員数を指すのではなく、「教育」というテーマを絡めてプログラムがつかれないか。子どもはもちろん、高齢者がそこで教えたり、学んだりできるような、いろいろな世代が「教育」というテーマで関われるような仕組みをつくれなかと。とにかく能代に関するあらゆるもの、歴史も自然も文化も人も、フラットに全部集めた博物館のような施設ができれば素晴らしいよね、という話をしていました。

井上 今言われた博物館のイメージは、誰もが何かしら居場所を見つけられる施設として考えている側面もあり、この場所に相応しいのではないかと思います。北高跡地に必要な施設や機能を住民に聞いたアンケートがあるのですが、その問いに「当面はそのまま維持」と答えた人が一定数います。そもそも北高跡地のことをよく知らない人もいます。



井上宗則
秋田公立美術大学景観デザイン専攻准教授

す。北高跡地がまちの起爆剤になるとしたら、北高跡地に期待していない人も巻き込んでいけるような場をつくりあげる必要がある。そんな考えから、今は、まず北高跡地に対してより多くの人に関心を持ってもらえるようなことをしなければいけないのではと思っています。

船山 北高跡地で起こる何かが全員に影響するというよりは、中心市街地に影響を与える何かが北高跡地で起こることで、それがじわじわ時間をかけて外側にも影響を及ぼしていく。それによって能代全体が少しだけ活気づくとか、何か新しい活動をする人が増えるとか、そういうことのほうが大事なかなと思います。

プロジェクトを継続していくこと、思考を続けていくこと

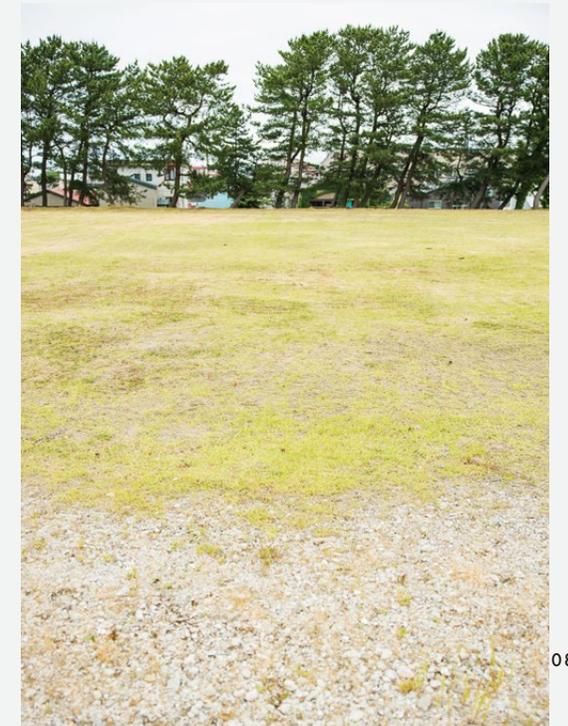
井上 今回提案した「思考継続型プロジェクト」は、段階的な議論を積み重ねて出てきたアイデアというわけではありません。実際は、どのような施設がい

いのかという議論が行き詰まったときに、ほぼ雑談のようなミーティングのなかで「つくりながら考える」というアイデアが浮かび上がってきました。これに限らず、考えに考えて、ふと力が抜けた時に何かがひらめくって、結構あることだと思います。これから実施するワークショップでも、行き詰まることはあると思いますが、そこで無理に結論を出すのではなく、行き詰まっていることを受け入れることは実は大切なことなのかなと。結論ばかりを追い求めるのではなく、北高跡地について思考すること、そのこと自体を利活用のひとつとして捉えたい。そんなプロジェクトを継続していくことで、ある時にみんなが「これだ!」と思える瞬間があるのではないかと。そうなるまで、このプロジェクトは続けていきたいですね。

船山 市民と並走する姿勢というのが大事なのだと思います。今回、敷地図を整理したり、ドローンを飛ばして撮影したりして感じたことなのですが、北高跡地は能代の深い位置にあって、そこで人の流れとか、水の流れとかをイメージしてアプローチし続けていくと、何かのタイミングで全体に派生する何かが起こるじゃないかと、期待感を持てる土地だと思います。10年とか20年の長いスパンで見ながら、長いスパンだからこそあまり気張ることなく一緒に並走してゴールを探す。ゴールは見つからないかもしれないけれど、ビジョンを共有して並走し続けることができれば、そこに可能性があるのではないかと漠然と思っています。

北高跡地をどうするかから、能代をどうするか、どういうまちにしたいか

小杉 令和3年度から始める市民参加のワークショップでは、北高跡地をどうするかはもちろんですが、それをきっかけとして能代をどういうまちにしていくなかという議論を深めていかざるを得ないでしょう。能代の産業のことや交通の未来についても、合わせて議論することが必要になるかもしれません。自分たちのまちの未来を考え、つくっていくための、楽しくて真剣なワークショップとなるように、私たちも並走したいです。





あとがき

公共施設は市民へ何かしらのサービスを提供するために整備されるものであり、それは昔も今も変わりません。近代以降に整備された日本のほとんどの公共施設は、行政主導で都市計画上の役割が明確に与えられた上で整備され、そこでの市民の立場は、サービスを享受する側というものでした。成長経済の只中ではそれが当たり前（と思いついていた？）で、なんとかやってくることができたわけです。しかし、「縮小の時代」である現在、拡大経済成長路線時代のやり方で公共施設を持続させることは、財政的にも人材的にも困難であることが明らかです。

ではどうするか。

答えは簡単ではありませんが、今言えることは、現在のまちの状況を今後変えていくには、ここ数十年かけて固定化されてきた公共事業の決定プロセスを見直す必要が

あることと、行政と市民の協働による公共施設の運営やサービスの在り方を模索せざるを得ないだろうということです。「自分たちの未来に本当に必要なものは何か」を、市民が議論する時間を増やし、実証実験なども含めた試行錯誤を経た上で公共事業の計画を進めることができれば、市民に愛される持続可能な文化と交流の公共施設が立ち現れる可能性は限りなく広がることでしょう。

市民と行政と一緒に未来を思考する創造的な場を、北高跡地利活用の計画プロセスに組み込めるかどうか、従来型の公共施設を超えるための重要なポイントです。自分たちのまちのよりよい未来を考えることは楽しいことですし、そのイメージを多くの人と共有することができれば、ここで何をすべきかが見えてきます。これはまさに市民協働によるクリエイティブなまちづくりです。北高跡地利活用を考えることを契機に、能代のまちの未来を、より具体的に描いてみましょう。（小杉栄次郎）





これから、ここから。

能代北高跡地利活用スタートブック／2021

プロジェクトメンバー

小杉栄次郎（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）

井上宗則（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）

船山哲郎（秋田公立美術大学景観デザイン専攻）

田村剛（NPO法人アーツセンターあきた）

2021年10月発行

ブックデザイン 越後谷洋徳

編集 高橋ともみ

写真 草薨裕、船山哲郎、越後谷洋徳

イラスト 佐々木萌

印刷・製本 秋田活版印刷株式会社

制作 NPO法人アーツセンターあきた

発行 公立大学法人 秋田公立美術大学
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3
TEL.0188-888-8100

※能代北高跡地利活用可能性検討業務の一部として作成しています。

©2021 Akita University of Art

本書の無断複写・複製・引用を禁じます。



